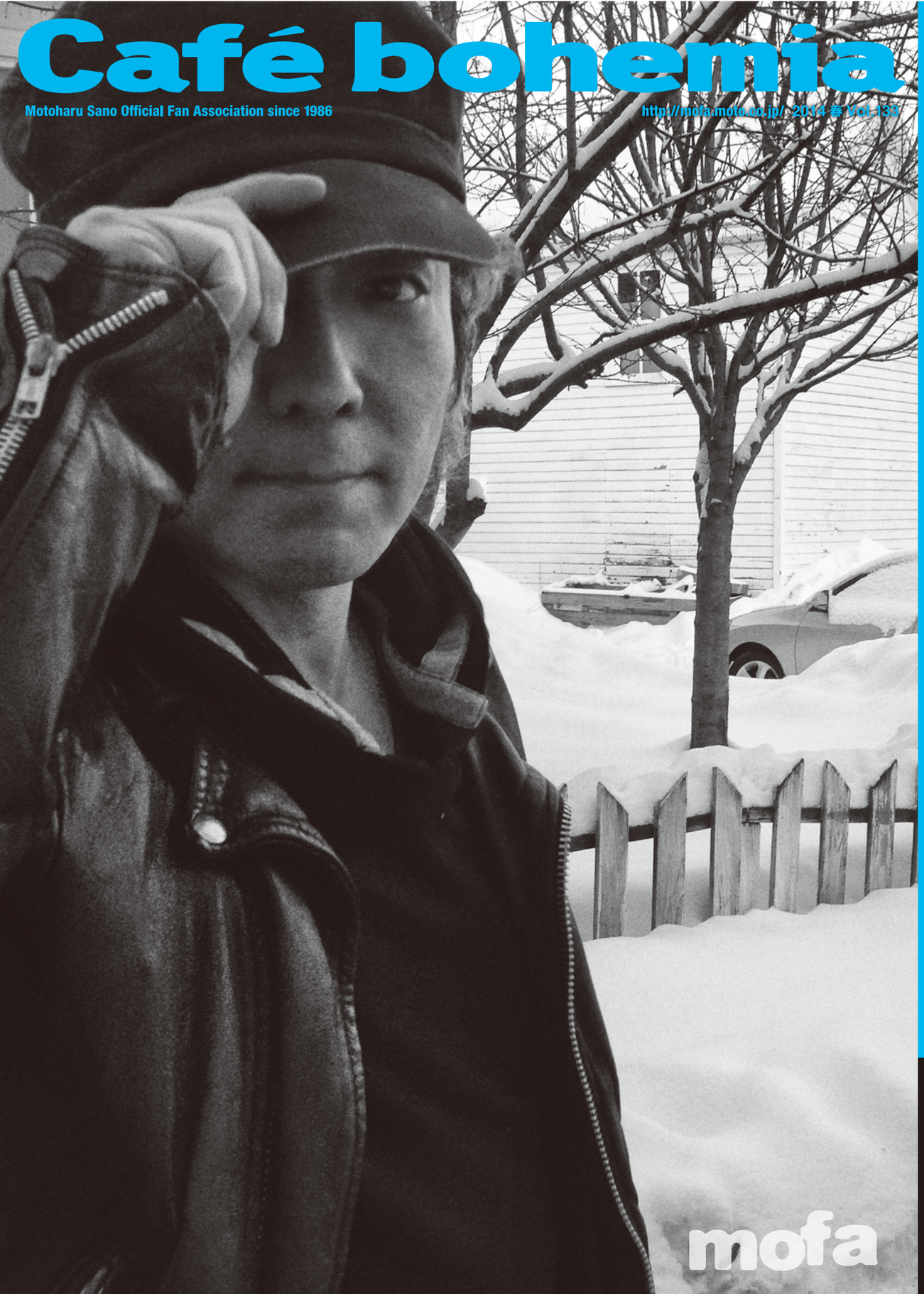
Café bohemia

Motoharu Sano Official Fan Association since 1986

http://mofa.moto.co.jp/ 2014 春 Vol.133



mofa

Café bohemia Vol.133

編 集 長: 大山貴
副編集長: 山田和弘
編　　集: 奥山千亜紀　小林史明　矢島一朗
編集協力: MFMP
デザイン: コヤママサシ
印　　刷: 高千穂印刷（株）
ファンクラブマネージメント: 有限会社カミングスター

監修: 佐野元春

Café bohemia Vol.133 April / 2014
発行: mofa　〒150-8691 東京都渋谷支店私書箱76号
編集: カフェボヘミア編集部　tel.03-5469-0922

http://mofa.moto.co.jp/

Cafe bohemiaに掲載された記事を許可なく転載することを禁止いたします。
2014 © M's Factory Music Publishers Inc. All rights reserved.

mofa メンバーのみなさんに

今年も誕生日がやってきました。

たくさんのお祝いをありがとう。
日頃から、僕の活動を支援していただき感謝しています。

この 3 月に、NHKFM「元春レイディオショー」が終了しました。
5 年間、愛聴してくださったみなさんに感謝したいです、どうもありがとう。

同じ3月に終了した、女性誌「DRESS」での連載「街空ハ高ク晴レテ」。
恋愛相談という未知の試みでしたが、思いのほか楽しくできました。
読んでくれたみなさん、どうもありがとう。

さて、来年 2015 年は活動 35 周年目にあたります。
今年は、来年に向けての助走の年、そう思っています。

まずは、ライブとレコーディングという、本来の自分の仕事を充実させたいと思っています。

現在、コヨーテバンドと共に、新作のレコーディングを試みています。
「Coyote」、「Zooey」に続く、さらに進化したコヨーテ・バンドの音楽を聴いていただけると思います。
発表は、まだ先になりますが、来年を予定しています。

ライブ・コンサート。
今年もバンドと共に全国を回ります。
まずは4月から始まる、ビルボード東京・大阪マンスリーライブ 'Smoke & Blue 2014'。
普段のライブコンサートでは演奏しない曲も多く披露したいと思います。

夏には、野外ロック・フェスが決まっています。
時間がある方はぜひ、ご家族、お友達と一緒に、参加してください。

秋には、コヨーテバンドと、全国ライブハウスを巡りたいと思っています。
普段のツアーでは行けない街で演奏したいと思います。

それと今年は、アルバム「Visitors」がリリースされてちょうど 30 年目にあたります。
「Visitors」をテーマに何かやってみたいと思っています。

そして、みなさんに知っていただきたいこと、今年 2014 年は、デイジーミュージックを設立して 10 年目となります。
レーベル 10 周年をテーマに何か記念したいと思っています。

何だか、やってみたいことのリストのようになってしまいました。

今年もまたみなさんと一緒に、音楽を通じていろいろな景色を見ていきたいと思っています。
ぜひ応援をよろしくお願いします。

僕の音楽とともにいてくれてありがとう。

2014 年の誕生日に寄せて

佐野元春

mofa

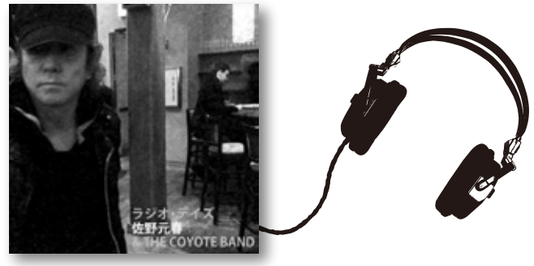
mofa ラウンジに 2014 年 3 月 13 日に書き込まれた元春からのメッセージです。

「ラジオ・デイズ」

シングルバージョン iTunes Store 限定リリース

RADIO DAYS

Who Could live without music ?



https://itunes.apple.com/jp/album/rajio-deizu/id828784910?i=828784911

1953 年に 15 才でレコード・デビュー。元祖・三人娘（美空ひばり・江利チエミ）と呼ばれて活躍し、
75 歳を迎えた今もなお圧倒的な輝きを放ち続ける国民的シンガー雪村いづみ。
デビュー 60 周年を祝し、佐野元春がプロデュースした 2 作品が 2 月 12 日（水）にリリース。

「かつて僕の両親が恋人同士だった頃、ふたりはよく新橋のダンスホールで踊っていた。僕が生まれる以前の話だ。
そのダンスホールには、まだ十代だった頃の雪村いづみが専属歌手として唄っていた。
僕の両親は 彼女の歌声に合わせて踊り、ロマンスを育んでいたのだ。
両親が生きていたら、今回の雪村さんとのセッションを見て何と思うだろう。」
（佐野元春 / アルバム『トーキョー・シック』ライナーノーツより）

佐野＆雪村の共演盤『トーキョー・シック』と雪村いづみオールタイム・ベストアルバム『スーパー・シック』。

佐野元春がプロデュースしたこれらふたつのパッケージは、
戦後の日本ポップ史を今に繋ぐ重要な価値を帯びたプロダクトといえるだろう。

佐野元春＆雪村いづみの共演盤『トーキョー・シック』

TOKYO CHIC



初回限定盤：紙ジャケット仕様 / Disc-1 6 曲入りスタジオ録音 / Disc-2 ドキュメンタリー + ミュージッククリップ / 52P フォトブック
■品番：VIZL-619 ■発売元：ビクターエンタテインメント株式会社 ■価格：3,500円＋税 〈特集サイト〉http://www.moto.co.jp/tokyo-chic/

佐野元春 プロデュース
雪村いづみ オールタイム・ベストアルバム

SUPER CHIC



2CD+DVD+ 全 84P 別冊解説書
企画監修：佐野元春
■品番：VIZL-604
■発売元：ビクターエンタテイメント株式会社
■価格：6,000円＋税

今年重要なのはデイジー・ミュージックの10周年、僕の音楽活動を支援してきてくれたみんなに感謝したい。

2014年3月14日　インタビュー・文／cb編集部

『シュガータイム』や『アイム・イン・ブルー』がリハーサル・スタジオに鳴り響いた時、これはうまくいくと確信した。

―　まずは昨年11月に東京、大阪で行われた、「SOMEDAY」名盤ライブからお話を伺います。再現にあたり、ダディ柴田さんをはじめとするかつてのバンドメンバーと共演されたことが話題になりました。

元春：　アルバム「SOMEDAY」を、アルバムの曲順通りに、当時の編曲通りに演奏してみないか、それを「名盤ライブ」と名付けてやってみたいんだけどというオファーを受けて、最初はあまり興味がなかった。オファーを受けたのは、僕らが実際にライブをした一年半から二年前くらいだった。実は興味がないから一度お断りした。ただ、オファーされる方が大変熱心で、一年後くらいに情熱をもってまた来て、どうしてもやりたいというオファーを受けたので、もう一度自分で実現の可能性についていろいろと考えてみたんです。そこで、もし古くからのファンの楽しみや喜びにつながるならやってみようかなという思いになりました。

　あのアルバム「SOMEDAY」の編曲、アレンジをそのまま再現するのであれば、やはり限りなくオリジナルのミュージシャンたちを揃えたい。そこで真っ先に浮かんだのは、ダディ柴田。ダディ柴田があのアルバムの中で披露している演奏というのは、一つ一つの曲のサウンドをしっかり性格づけていて、彼の素晴らしいサックスプレイなしでは成り立たないと言ってもいいくらい重要なパートでしたから。それからキーボードで言えば西本明。『ロックンロール・ナイト』にしても『SOMEDAY』にしてもキーボードのフレーズは彼が担当してくれたわけですから。そのように、限りなくオリジナルメンバーが揃うのであればやってみようかな、と思ったんです。ミュージシャンたちに連絡を取ったら、ちょうどスケジュールが空いていて。元ハートランド（HL）のメンバーもザ・ホーボーキング・バンド（HKB）のメンバーも忙しい連中ですから、こう、すっすっと揃うということは、何か、実現しなさいということかなと啓示を受け、そこから話が進んだという感じです。

　まずはアルバム「SOMEDAY」でそれぞれのミュージシャンたちがどういうフレーズを演奏していたかをもう一度振り返りたかったので、オリジナルマルチテープをスタジオでかけて、各パートの演奏が際立つようなミックスを自分でやり直し、それを資料としてミュージシャンたちに「練習してきて」って渡しました。リハーサルで集まってきたときにみんなしっかり予習してきてくれたので、『シュガータイム』や『アイム・イン・ブルー』がリハーサル・スタジオに鳴り響いたときに、これは素晴らしいな、これはうまくいくとすぐに思いました。

ダディ柴田。80年代のロックバンドでサックスの一つのスタイルを作ったと言っていい。

―　初めはダディ柴田さんがステージに登場されたのを観て感動したのですが、途中からいらっしゃるのが普通という感じになりました。

元春：　日本のミュージックシーンにおいて、ダディ柴田はもっと高く評価されるべきだと僕は思っています。80年代において、ああしたロックバンドの中におけるサックス、ここで一つのスタイルを彼は作ったと言っていいと思



漫画家の浦沢直樹氏とニューヨークのダウンタウンにあるセント・マークス教会の前にて。

名盤ライブ、「SOMEDAY」に続く作品が何なのか、そこが心配（笑）。

う。僕が彼に求めたプレイはロックだけじゃなくて、ジャズ、R&B、アヴァンギャルド…さまざまな僕の要求にしっかり応えてくれた。ミュージシャンとして優れているだけではなく、古くからのファンなら知っている通り、ステージ上でのゴキゲンなパフォーマンスだよね。ああしたパフォーマンスもできて、しかも音楽的に優れたプレイヤーというのは日本では稀有です。だいたい管楽器の人たちはカッコつけていますから（笑）、ジャズだの何だの言って、ロックのステージで暴れてサックス吹くなんてみっともねえじゃねえか、なんて人もいるんだけれども、とんでもない。僕のサウンドの中でダディ柴田のサックスプレイは非常に重要なものでした。その楽曲の中に含まれている彼のサキソフォンが時に僕の感情を増幅してくれて、時に僕の感情を柔らかくしてくれる。そういう大事な役割をしてくれた。サキソフォンというのはみんなも知っている通り、ヴォーカルと同じように表現される。ここがドラムや、ベース、ギターと違うところです。だから、「よき唄い手」という言葉がシンガーにあるとしたら、この言葉がサキソフォンプレイヤーにも当てはまる。そうした意味でダディ柴田は僕にとっては最高のサキソフォンプレイヤーでした。

その彼ともう何十年ぶりかにステージを一緒にして、ホントに僕は感激しました。何に感激したかというと、僕とダディ柴田、過去において何度も同じステージを踏んでいますけれども、過去のステージと同じように、僕の右側に彼がいる。そしてソロパートとなると、舞台の前に出て行って、僕の視野に入ってくる。ゴキゲンなプレイをすると思わずダディに近づいて行って、彼を励ましたりすごいねと言ったりする。それがそのまま、あの日同じように、同じ気持ちになったということ。同じ気持ちになったということは、彼のサキソフォンの演奏に衰えがないということです。相変わらず「ダイナマイトサキソフォン」。改めて敬意を表しました。

アルバムは、バンドと優秀なエンジニア、スタッフの共同作業によってできるということを、僕のファンにはわかってもらいたい。

―　ライブで配られた書籍も大変な充実度でした。

元春：　はい。あれはお金には換算できない価値があると思っています。この「SOMEDAY」名盤ライブは、ソニー・ミュージックに勤めるプロデューサーが発案した。そのプロデューサーは僕の80年代の活動をよく知っている。その「名盤ライブ」はとにかくアルバム「SOMEDAY」から始めたいんだという熱意があった。ただライブで再現するだけではなくて、アルバム「SOMEDAY」というものがどういう作品だったのかということの検証も自分たちでやってみたい。それを映像と書籍とライブで表現したいんだと言ってくれたんです。僕が過去に作ったアルバムにそこまで熱意をもってやってくれたということは一つの愛情でしょう、あのアルバムに対する愛情を感じ、感謝し、途中からはその思いに応えようと思っていました。付属していた書籍は、ソニー・ミュージックの人たちがずいぶん時間をかけて、みんなで知恵を出してやっていたみたいです。僕は一切、あの本にはタッチしていなかった。

僕は今のところ、「SOMEDAY」の解説本としてあれが一番、事実に基づいたよいものではないかなと思っている。僕は事実に基づいた検証というのはすごく好きです。彼らはマルチテープを持ってきて、そこに書いてあるクレジットからいろいろ推測したり、当時制作に携わっていた人たちにインタビューして、そこで検証したり…そうした地道な検証作業を行った。その辺の商業雑誌で「SOMEDAY」の魅力に迫る、なんていってもそこまで一生懸命、細かく取材したりしない。そういう点では頭が下がりました。

僕としては、名盤ライブ「SOMEDAY」に続く、次の作品が何なのか、そこが心配ですね（笑）。

―　佐野さんがOKしなければ、この企画自体…

元春：　「名盤ライブ」というシリーズはありえなかったと、お話してくれました。

―　DVDでは吉野さんとの会話で涙が出てきました。

元春：　吉野金次さんはご存知の通り、アルバム「SOMEDAY」のエンジニア。それより前に、日本のロックシーンの黎明期にあって、表現としてのエンジニアリング、これを実践した最初の世代の人です。大瀧（詠一）さんのソロアルバム、「ばっぴいえんど」のエンジニアリングもやっている方。アルバム「SOMEDAY」を作るときには、エンジニアとしては吉野金次さんしかいないだろうということで、僕の方から彼にお願いに行った。本当に素晴らしい仕事をしてくれましたよね。あのアルバムは吉野金次さんなくしてはできなかった。僕はそう思います。のちに少し脳梗塞でお休みの時間があったんですけれど、復帰なさって、また現場に戻られている。この「名盤ライブ」のプロデューサーが、吉野さんとの対談を実現したいと、それも熱意をもってやってくれたので、吉野さんと対談できるのであれば僕もしっかりやりたいということで実現したんです。

―　DVDは一つの作品の制作ドキュメントとして素晴らしかったと思います。

元春：　まず、一枚の素晴らしいアルバムがあって、それがどのようにしてできたのか、そこが心配（笑）。

カウントダウン・ジャパンでは、『ポーラスタア』のアレンジを変えて演奏し、大瀧さんへの追悼としました。

現したいんだと言ってくれたんです。僕が過去に作ったアルバムにそこまで熱意をもってやってくれたということは一つの愛情でしょう、あのアルバムに対する愛情を感じ、感謝し、途中からはその思いに応えようと思っていました。付属していた書籍は、ソニー・ミュージックの人たちがずいぶん時間をかけて、みんなで知恵を出してやっていたみたいです。僕は一切、あの本にはタッチしていなかった。

僕は今のところ、「SOMEDAY」の解説本としてあれが一番、事実に基づいたよいものではないかなと思っている。僕は事実に基づいた検証というのはすごく好きです。彼らはマルチテープを持ってきて、そこに書いてあるクレジットからいろいろ推測したり、当時制作に携わっていた人たちにインタビューして、そこで検証したり…そうした地道な検証作業を行った。その辺の商業雑誌で「SOMEDAY」の魅力に迫る、なんていってもそこまで一生懸命、細かく取材したりしない。そういう点では頭が下がりました。

僕としては、名盤ライブ「SOMEDAY」に続く、次の作品が何なのか、そこが心配ですね（笑）。

―　佐野さんがOKしなければ、この企画自体…

元春：　「名盤ライブ」というシリーズはありえなかったと、お話してくれました。

―　DVDでは吉野さんとの会話で涙が出てきました。

元春：　吉野金次さんはご存知の通り、アルバム「SOMEDAY」のエンジニア。それより前に、日本のロックシーンの黎明期にあって、表現としてのエンジニアリング、これを実践した最初の世代の人です。大瀧（詠一）さんのソロアルバム、「ばっぴいえんど」のエンジニアリングもやっている方。アルバム「SOMEDAY」を作るときには、エンジニアとしては吉野金次さんしかいないだろうということで、僕の方から彼にお願いに行った。本当に素晴らしい仕事をしてくれましたよね。あのアルバムは吉野金次さんなくしてはできなかった。僕はそう思います。のちに少し脳梗塞でお休みの時間があったんですけれど、復帰なさって、また現場に戻られている。この「名盤ライブ」のプロデューサーが、吉野さんとの対談を実現したいと、それも熱意をもってやってくれたので、吉野さんと対談できるのであれば僕もしっかりやりたいということで実現したんです。

―　DVDは一つの作品の制作ドキュメントとして素晴らしかったと思います。

元春：　まず、一枚の素晴らしいアルバムがあって、それがどのようにしてできたのか、そのバックグラウンドに多くの人たちはそれほど関心を払っていない。しかし音楽ファンや、そのアルバムにとても大きな啓示を受けた人であれば、当然、このアルバムはどういう人たちによってどういうふうに作られたんだろうって背景を知りたくなると思うんです。僕もまた、一枚のアルバムができるときには、ただバンドが集まって、ゴキゲンな演奏をしてできるわけじゃなくて、そこは優秀な裏方、裏方という言葉は僕は嫌いなんだけれども、優秀なエンジニア、スタッフがそこにいて、その人たちの共同作業によってできてくるんだということを、僕のファンには少なくともわかってもらいたい、そういう思いもありました。世間に言うところの「メイキング・オブ」という言葉かな。ただ「メイキング・オブ」と銘打たれている日本の多くのドキュメンタリーはどこが「メイキング・オブ」なんだといつも僕は思っていた（笑）。だから本当の「メイキング・オブ」というのはこういうものなんだということを知らせたかった。少なくとも僕のファンには知ってほしかったというところです。

自分がかつて作ったものが今に鳴り響いているか、普遍性が宿っているか。ノスタルジーが僕は一番イヤ。

―　名盤ライブ「SOMEDAY」を成功させて、機会があったら次に取り上げてみたいアルバムは何でしょうか。

ライブが恵比寿で行われました。今回のバンドメンバーはザ・コヨーテ・バンド（CB）を中心に、ドラムとキーボードに古田たかしさんとDr. kyOnさんが参加されました。

元春：　HL、HKB、CB、この3つのバンドメンバーは、僕のクラシックから新しいアルバムまで、みんな知ってくれている。僕の曲を共有している仲間たちと言えると思うんだよね。それぞれのミュージシャンがそれぞれの楽曲に独自の解釈をもって演奏してくれているんだけれども、そこで起こる化学反応というのは、僕にとってみればとても面白い。同じ楽曲でもプレイヤーが少し変われば表情は変わってくる。もちろん僕が唄っているので、楽曲の核の部分は変わらないんだけれども、そうしたバンドに化学変化が起こると、僕も影響されて、少し表現を変えたりする。実際それがライブであり、バンドですから、僕はそれを楽しんでいて、彼らも楽しんでいます。だからいいことだと思っています。

―　ルルティモ・バーチョは3回目になりますが、毎回すごい盛り上がりですね。私たちも楽しくて仕方がありません。

元春：　年末ということもあるし、クリスマス時期ということもあるし、パッと一年の憂さを晴らそうぜとそういう解放感があるよね、僕もそうです。

「ルルティモ・バーチョ」、年末、クリスマス時期で、一年の憂さを晴らそうぜ！

―　続いて、12月にルルティモ・バーチョというライブの次に何をやりたいですか、と言ったら「ヴィジターズ」だね。

元春：　前日（12月30日）の訃報を翌31日に聞き、その数時間後にライブをやる。非常にタフな状況だよね。それでもミュージシャンとして、やれることは何かと僕は思い、僕なりのやり方で追悼しようということで、急遽『ポーラスタア』という曲のアレンジをあの日用に変えて演奏し、それを大瀧さんへの追悼としました。

聴衆たちは、おそらく10代後半から20代前半。大瀧詠一という名前は聞いたことはあっても、どんな音楽をやってきたのかほとんど知らない人たちだと思う。僕はその彼らに知らせる必要があった。大瀧詠一という、日本の音楽シーンの中でしっかりした仕事をなさった方だし、その後への影響力も大きかった方です。その彼がいて僕がいて、そして僕に続くミュージシャンたちがいるわけですから。ロックフェスだから多くのミュージシャンとそのファンが一堂に集まっていたでしょ？大瀧詠一さんの訃報というのは、あらゆる聴衆たちに、知っている、知らないにかかわらず、知らせるべきだという使命感を僕は感じていました。

大瀧詠一さんの訃報、あらゆる聴衆たちに知らせるべきだという使命感を僕は感じていた。

―　そしてその後、こちらも恒例となっているカウントダウン・ジャパン。今回は大瀧さんの訃報をお聞きした直後のライブということになりました。

あまりにも短い期間にたくさん作品をリリースして、私たちの財布のことも考えて！ と言いたくなるほどの（笑）。

―　大瀧さんをボーラスタア、北極星に例える表現を爆笑問題のお二人も、「素敵だね」とラジオで言われていました。

元春：　言っていたの？よく、「巨星墜つ」なんて書いてあったけど、まさにその通りだなと思いました。僕はオフィシャルのフェイスブックで、すぐに追悼を出した、そしてその後すぐにライブがあったんだよね。気持ちをきちんとしておくのに大変だったのを覚えています。楽屋で誰が話しかけてきても、集中していたから応えなかったんじゃなかったかな。

僕のファンには最高に素敵なプレゼントをしたい、そういう思いがいつもある。

―　話は変わって、前回インタビュー後に作品のリリースが相次ぎました。

元春：　一番思ったのは、忙しかったということです。あんまりにも短い期間にたくさん出し過ぎちゃって、ファンの人ごめんなさいっていう感じ（笑）。まずそれが最初にありますね。でも調子がよいときというのは止むに止まれぬ衝動というのがあって、今はディジー・ミュージックという自分のレーベルを持っていますから、リリース計画は自分でどんどん立てられる。ですので今感じたことはすぐにファンに伝えられる状態になっています。思い余るといっぺんにいろんなたくさんのものが出ていっちゃうということになるんです。でも私たちの財布のことも考えてくださいという感想もありましたね（笑）。一つ一つのクオリティはすべて僕のお墨付きというか、もちろんたくさん出したからといって手を抜いているものはつもない。むしろ高い水準のものをよくこれだけの短い期間に発表できたなと思っています。

―　なかでも、「ノー・ダメージ・デラックス・エディション」の中野サンプラザ公演の音源、本当にしびれました。よくぞ入ってくれたなと。

元春：　世の中にデラックス版というのがあるけれど、何がデラックス版だ、デラックス版とはこういうものだというのが僕の考え方なんです。僕は、僕のファンには最高に素敵なプレゼントをしたい、本当のものを提示したい、そういう思いがいつもあります。だから余談になるけれども、僕がしっかりしたものを作るとデラックス版というもののハードルが上がるので、レコードメーカーがいつも文句を言うんです。佐野君があのような高水準なものをあの価格で出されると、うちらもうやってられないよって。そんな人のことは知ったこっちゃないって話だよね。君らも高水準のものをああした価格でしっかり出したらどうだって話。ちょっと自慢話に聞こえちゃったかな（笑）。

―　いえ、その通りだと思います。

元春：　本当のことだよね。これまで、佐野元春アーカイブシリーズをがんばって作ってきました。「SOMEDAY」「ヴィジターズ」「カフェ・ボヘミア」「ナポレオンフィッシュと泳ぐ日」、80年代のプロダクツに関してはしっかりした形で、いわゆるデラックス版としてリリースしてきました。ただそれも、僕はノスタルジーで終わらせたくないんです。佐野元春アーカイブシリーズの目的は、もう一度検証して今の時代に鳴り響かせること。ですので当時未発表であったビデオや音をそこに付けて、実際にリリースしたものの周辺ではどういうことが起こっていたのか、なぜこの一枚になったのかということをもう一度ファンと一緒に楽しんでみたい。すごく意義のあることなんです、このアーカイブシリーズというのは。だからこの前の「名盤ライブ」もビデオと書籍が付きましたけれども、言ってみればアーカイブシリーズの真骨頂です。スタッフもがんばってくれたなぁと思います。

僕とバンドのエネルギーがそのまま真空パックされていた、それが「ライブ・アット・ザ・サンプラザ」。

―　改めて、「ノー・ダメージ・デラックス・エディション」についてお聴かせください。

元春：　「ノー・ダメージ・デラックス・エディション」、あれは僕も作ってよかったと思っています。「ノー・ダメージ」は実を言うと僕のキャリアの中で最初にチャート1位になったアルバムです。「SOMEDAY」は4位でしたから。あとで振り返ってみればあのときこそ僕の音楽が多くの人たちに認められた瞬間だと思う、そのとき僕はニューヨークに行っちゃったのでどういう感じかよくわからないんだけれども。だとしたらそれをしっかり検証してデラックス版を出す理由がまずあるよね。

　ファンが喜んでくれるものということで検証したら、当時の中野サンプラザ公演のマルチテープがそのまま残っている。一部はもう出ていたんですよ、『ガラスのジェネレーション』のビデオにくっついて。ビデオできちんと『ガラスのジェネレーション』や『悲しきレイディオ』が残されているのであれば、どこかにマルチ（テープ）があるんじゃないかっていうところから探っていって、実際にレーベルにあった。それを僕の盟友と言ってもいいエンジニアの坂元達也が自分がやると言って、そしてそのマルチを全部解析してデジタルに取り込んで、彼は黙々と作業を始めた。「佐野君、1、2曲できたから聴いて」って、そして聴いたら僕はもうびっくりして、すごいね！って。何がすごいって、トータルですごかった（笑）。当時の演奏がアナログテープにしっかり残されているということ、それから当時のHLのバンドとしてのエネルギーがそのまま真空パックされていたということ。僕のヴォーカリストとしての情熱とか若さ、当時27歳かな、一人の青年とバンドの真



実の記録がそこにあったということです。聴いた時、ものすごくリアルでした、すごい力を持っているなって。じゃあ、この調子で他の楽曲もミックスしてくれる？って言ってできたのがあの、「ライブ・アット・ザ・サンプラザ１９８３」。

― アンコールまで、すごいボリュームでした。

元春：CDに収録する時間の制限もあって、全曲じゃなかったんですね。3、4曲漏れたんです。

― でも、あれだけ聴かせていただければ！

元春：僕もロックバンドのライブバージョンを聴くのはすごく好きで、僕の中では、ザ・バンドの「ラスト・ワルツ」、ザ・フーの「ライブ・アット・リーズ」というザ・フーの初期を記録したライブアルバムがあるんだけど、その二つは大好き。「ライブ・アット・ザ・サンプラザ」、聴いたときにその二つに並ぶなと自分で思いました。自分のライブではあるんだけどかなり昔のライブなので対象化して聴けるんですね。すごく冷静に聴いて、これは本当にライブアルバムとしても、僕の大好きなその二つのアルバム、特にザ・フーの「ライブ・アット・リーズ」に負けないリアルなエネルギーに満ちているなと。すぐ僕のフェイバリットになりました。ということはファンの人たちも喜んでくれているのかな。

― 臨場感がすごくて、映像が見えてくる感じです。あのよい状態で録れていたからこそ実現できたということですよね。

元春：記録媒体としてはアナログがベストなんです。マルチ（テープ）でちゃんと収録していたから30年の時を経ても、昨日のことのように再現される、当時の空気感までも記録されていたんだなぁという感じです。

― 30年も前の音源なので、ちょっとこもった感じも覚悟して聴いたのですが、音が実にクリアで驚きました。

元春：僕のファンのみなさんは、ともすると誇りに思ってくれていると思うけど、１９８３年の時点であれだけしっかりした録音を残したこと、あれだけしっかりしたフィルムを残したこと、もし時間がある方は、１９８０年前後であれ以上のクオリティできちんと残した他のロックのプロダクツがあるか検証してみてほしい…ない。僕自身、これからやってくる未来の僕の音楽ファンのために僕のその時の姿を伝えたいという気持ちがあった、今で言うアーカイブの意識が当時からあった。だから無理して、ちょっとお金もかかるし無理もあったんだけれども、24チャンネルのマルチテープできちんと音を残しておいた。そしてフィルムもきちんと、ただのドキュメンタリーじゃなくてちゃんとプロットを持った一つのロック映画として編集したものを残しておいた。それが30年後に発掘されてそして現代のデジタル技術でもってもとの演奏をしっかり再現することで、過去のエネルギーをそのままみなさんに伝えるということが可能になった。それはちゃんとした形で当時リソースを残しておいたからできたことだと、そこは僕は今もってやっておいてよかったと。古くからのファンだけではなく、新しい世代のファンのためにも、あのときてよかったと思っています。

ウィンター・ツアー、ライブフィルムとしてのクオリティは非常に高いと思っている。

― ウィンター・ツアーのライブDVDもリリースされました。

元春：ウィンター・ツアーのDVD、「ノー・ダメージ・デラックス・エディション」など、派手なものに埋もれている感じがするんですよね（笑）。決してそんなことない、あのウィンター・ツアー、ファンに僕が伝えたいのは、去年の時点でCB、8年めかな。僕たちは東京国際フォーラムに戻ってきたという感覚があったんだ。覚えている通り、CBとして僕を含め4人で出発したときには、7年前の東京国際フォーラム、HKBのライブのラストに1曲だけ登場した。ラウドにかましてCBもよろしくという感じで演奏した。あれから僕たちは2枚のスタジオアルバムを作り、何度かの全国ツアーをしてバンドとして技を磨き、絆を深め、そして「COYOTE」というアルバムを作り「ZOOEY」というアルバムを作ってそれを引っさげて東京国際フォーラムに7年後に戻ってきた。そのとき1曲だけじゃなくて全曲、僕のクラシックも含めて演奏した。それは僕の古い曲にCBは新しい息吹きをもたらしてくれていて、記録に値するいい演奏だったと思う。ちょっとまわりの大物（作品）に隠れちゃって（笑）目立たないかもしれないんだけど、ライブフィルムとしてのクオリティは非常に高いと思っていて、僕はこの作品をすごく誇りに思っています。

― そして、iTunesでリリースされた『みんなの願いかなう日まで』、クリスマスまでにリリースという約束を果たされました。心暖まるいい曲ですね。久しぶりに佐野さんの新しいクリスマスソングが聴けて嬉しかったです。

元春：ありがとう。僕も2年前くらいにもう1曲クリスマスソングを書いてもいいかなと思って、ずっと温めていた曲で、ついに去年リリースできたので僕も嬉しかったです。ホッとしています。

― 恵比寿公演ではまだ観客の私たちも上手にハモれなくて申し訳なかったんですが。

元春：コーラスをハイパートとローパートと、会場を二つに分けてみんなでハモってみたんですけど、ちょっと難しかったですね（笑）。

― 来年また挑戦ということで。練習しておかないと。

元春：でも僕のファンは、僕から提示したものを次々乗り超えていくんだよね（笑）。そういうすごさがあるので僕も油断できないです。このへんでいいだろうなんて一度も思ったことはない（笑）。

『トーキョー・シック』、雪村さんの中のジャズと僕の中のジャズがいい形で重なり合った。

― 雪村いづみさんとのコラボレーションの『トーキョー・シック』ですが、CDとDVDをリリースされての感想などお願いします。

元春：デイジー・ミュージックから初の僕以外のシンガーの作品となりました。これは大瀧



雪村さんとの共演を通じて、僕が音楽活動している理由がはっきりとわかった。

るんだけれども、日本においてはそれが表に表われてこないような気がして。例えばグラミー賞を観ても、やはりそれなりに貢献してきた古い世代のアーティストと、その流れにある若いアーティストがコラボレーションすることによって、古いファンは新しいアーティストを知り、新しいファンは古いオリジネーターのことを知る。そうすると音楽文化を人々は流れで捉えることができる。日本においてはそういう場が表に出てこないので、音楽文化といってもいつも点で終わっている。ある世代がある世代のバンドやソングライターと数年間過ごしてバンドが解散したらすべておしまい、そういう点で存在しているので流れにならない。流れにならないということは歴史が形成されていない、歴史はあるんだけれども、それがみんなにわかりやすい形で歴史が感じられないという状況なんだよね。僕はそこを打破したかった。少なくとも僕のファンには…今日、この言葉多いよね、「少なくとも僕のファンには」っていうの、それが今日のテーマになっているかもしれないね（笑）。それで僕のファンにはそうじゃないというところを見て感じてもらいたかった。そしてそれをものさしにして他のものを見てほしいという気持ちがある。雪村さんとのコラボレーションにはそういう思いもありました。

あと、パッケージのライナーノーツにも書いたんだけれども、僕の両親が通っていたダンスホールで雪村さんが専属シンガーとして唄っていて、両親がロマンスを育んでいたその先に僕が生まれているわけですから、そのへんは連なっているわけです。雪村さんと僕が今こうして出会って共演するというのも偶然じゃなくて、ある必然性に基づいてやることやりますよって話なんだよね、僕にとってみれば。だから、アルバムの帯にも、雪村いづみというシンガーとの邂逅、出会いだよね、それは偶然ではない、と書いたんだ。そのように、雪村いづみプロジェクトは僕も率先してしっかりやろうと思って、上手くまとめられたのはすごく嬉しい。自分の出所を探る旅でもありました。そこに行き着いたのは、お父さんお母さんありがとう。そしてそれに気づかせてくれた雪村さん、本当にどうもありがとう。こういうことです。

僕は何も気取ってない。僕のお父さんお母さん見てください、もっと気取っているんだから（笑）。

―ブックレットの最後にお父さまとお母さまの写真が載っていますね。

元春：躊躇したんだけどね。ファンに公開しようと思って。

―本当に素敵な写真ですね、きれいでカッコよくて。

元春：母の写真はこれだけじゃなくて、この当時固め撮りしているみたいで、きれいな写真がいっぱいある。父の写真もいっぱい、何かカッコつけているんだよね。

―昔の人は写真うつりが本当にきれいですね。

元春：僕らのお母さんの時代、みんなポージングしている。だから美しく撮られることの練習をしている。母の年代の今の女性たちの写真は、みんなVサインですね（笑）。

―スナップ写真というよりはプロマイドですね。

元春：そこにある、僕の言葉で言わせてもらえば、エレガンスですよね。それから人は美しくあろうという精神が僕の父母の世代に残っていて、今はそれがなさすぎるんじゃないかなと。ちょっと佐野元春、気取っているんじゃないのって思っている人もいるかもしれないけれど、僕は何も気取ってもいない、これが地ですから。僕のお父さんお母さんを見てください、もっと気取っているんだから（笑）、この人たちに育てられたんだからちょっとわかってくださいっていうのがあるよね。この人たちに僕は育てられました。だからいづみさんも、母より若干若いですけれども、ちょうど母を見ているような感じですね、雪村さんがそばにいると。（雪村さんが育ったのが）雪谷、僕は下町浅草、ちょっと遠い親戚のおばさんと法事で会いましたみたいな（笑）。

―雪村さんはとてもチャーミングで、佐野さんと並んでいてもそんなに歳の差を感じないと言いますか。

元春：厳しい芸能界を生き抜いてきて、名うてのミュージシャンたちの間で揉まれてきた方ですから頭の回転はすごく速い。何がすごいって洒落ですね、ポンポン洒落が出てくる。頭がいい。

―大沢悠里さんがラジオで雪村さんを評して、「この歳になると答えにくいことや面倒くさいことは全部「忘れちゃった」って言えばいいと思っている」って言われていましたね。確かに、もう忘れたわってすぐ言いますね、彼女。

元春：どこからどこまでが本当なのかわからない（笑）。でも雪村さんを通じて、なぜ僕がここで唄を唄い曲を作り音楽活動しているのかという理由がはっきりとわかった。僕は雪村さんにすごく感謝しています。彼女はもっと評価されるべきです。

―新曲の『もう憎しみはない』も彼女にぴったりですね、ミュージカルの一場面を観ているようでした。

元春：みんなそう言いますね、ディズニーみたいだって。僕もそのようにプロデュースしました。彼女自身の人生は、一つの物語だと僕は思うんです。人の経験してないことを経験してきている。まずスターですからね、その人生そのものが僕はストーリーだと。そのストーリーに合った曲を作るということです。彼女の人生に合ったストーリーを僕の中で紡ぎなおして曲として出して、彼女が唄うことによってその曲の深みといったものがよきものとして人々に伝わるのではないかと、それが僕のプロデュースの考え方。

『もう憎しみはない』、あの曲は雪村さん以外の人が唄ってもあれほどの説得力は持たないだろうと僕は思う。この曲のテーマは愛と憎しみ、そしてその先にある寛容。こうした深みを持ったテーマは、AKBなんとかには唄えないんじゃないですか。バカな例えを言ってしまいましたけれども（笑）。雪村さんが唄って説得力のある曲というのは随分考えました。あの曲はいい曲だなと僕も思います。MRSでもオン・エアしたんだけど、まずスタッフがね、あの曲がスピーカーから流れてきたら、それまでほとんど喋らない録音係の人がふっと顔を上げて、この曲いいですねって。そういう力がある。

―カップリングに『こんな素敵な日には』『Bye Bye Handy Love』を選ばれていますが、ジャジーなアレンジがすごくよい感じです。

元春：まさにジャズオーケストラに合った曲、自分の過去の曲をダーッと振り返ったときにこの2曲はジャズオーケストラに合うだろうと、そこから選びました。

―もともとこのカップリングの2曲のレコーディングは予定されていなかったとか？

元春：僕は雪村いづみさんの『トーキョー・シック』と『もう憎しみはない』、これさえしっかり録れたらOKと、それで前田（憲男）さんとミュージシャンたちに声をかけて。前田さんとお話をしたらせっかくジャズオーケストラをこんなに揃えたのに2曲のレコーディングではもったいないよって、昔はレコーディングといったら一日に3曲も4曲も録っていたんですよって。そうなのか！と思って、じゃあっていうんで（笑）振り返って『こんな素敵な日には』と『Bye Bye Handy Love』をやってみたいなと。

一日で4曲って言っていました。今の僕たち、普通のバンドのレコーディングはだいたい一日1曲で精一杯。でもあのベテランミュージシャンたちの演奏はしっかりしていますから、初見でコンプリートな演奏をする。前田さんが指揮振って、ワンツースリーで始まって、テイク1テイク2でもうできている。しかもエンジニアの行方（洋一）さんというベテランも、ジャズオーケストラの特徴をよく捉えて、そのノウハウを知っている。彼が卓でフェーダー（音の入力・出力レベルを調整する操作盤）をまっすぐにピッと並べるだけで、もうレコードの最終的なミックスがそこにある。ああ、だから昔の人たちは一日に3曲も4曲も録れたんだなって。そのかわりその緊張感は…歌手だって一発で上手く唄わなくちゃいけないし、でも昔の歌手はそれが当たり前なんだね。現場に行って他のミュージシャンに迷惑かけないように家でよーく練習してきている。失敗したら録り直しってことになって、何だよって話になる。家でしっかり練習してきてヴォーカルに臨む。それで一発録り。50年代から60年代の最初くらいまでレコーディングというのはそういうものだったんじゃないでしょうか。その方法をやりました。

昔のレコーディングはアレンジャーがいてミュージシャンがいて、歌手が入って、じゃあ録音するよってディレクターが言って、テイク1、テイク2ですべてそこでできあがっている。ほとんどミックスもそこでできあがっている。そして歌手は自分の唄が終わったらすぐに帰らなきゃいけないもの、どうもありがとうございます、失礼しますって。今回の収録も雪村さん、すぐに帰ろうとして（笑）。だからそうやって一日に3曲も4曲もちゃっちゃっと録っていたんだなあという話です。でも、やり方にしてもレコーディングの仕方にしてもすべて僕の要望で、ミュージシャンや前田さん、行方さんがやりやすい形でやってもらいました。僕ももあいうレコーディングは初めてでしたし、全部のメンバーの中で僕が一番年下だっていうプロジェクトはあれが初めてです。

レコーディング、振り返ってどうですかって言われたら一言、「心意気です」。

―古き良き感じがするんですね、しっかりした音づくりからなんでしょうか。

元春：今では打ち込みが主流の音楽作りになってしまいましたけれども、こうしたヒューマン・プレイを生かした血の通ったレコーディングもあるんだということを、少なくとも僕のファンにはわかってほしい（笑）、そういう思いがありました。

こうしてレコード化されてみなさん楽しんで聴いてくれていると思うけれども、今ね、本当にCDが売れないらしい。CDが売れないということは、制作原価が潤沢に取れない。10年前20年前から比べたら制作原価は二分の一どころじゃない、おそらく五分の一くらいに落ちている状況。非常に厳しい。だから、メインストリームの音楽を聴いて、アイディアはいいんだけれども音楽作品として僕の耳で聴いて豊かなものがどんどん減っている。何か僕たちは音楽文化

「佐野元春のバック・トゥ・ザ・ルーツ」、少なくとも僕のファンには、本当の音楽ドキュメントを観てもらいたいという思いで臨みました。

―　BSジャパンで昨年末にオン・エアされました「佐野元春のバック・トゥ・ザ・ルーツ」ですが、ご自身でご覧になってどんな印象を持たれましたか。

元春：（肌が日焼けしていて）黒いなと思いました（笑）。自分で観ていて楽しかったですね。あのドキュメントは2時間にすぎませんけれども、本当は他にも何時間ももっともっといろいろなことがありました。ただ凝縮してみんなに観てもらうということであれば、ああいう形が妥当かなと思っています。

―　番組の作り方に無駄がなくて見応えがありました。改めてすごい企画だなと。記録映像としても非常に貴重な、一つの作品のようでした。

元春：　少なくとも僕のファンには本当の音楽ドキュメントを観てもらいたい、そういう思いで臨みました。

　ドキュメントの一つの核となっているのが、非欧米のミュージシャンたちとのコラボレーション。トリニダード・トバゴにおいてはスティールパン奏者たちとのセッション。そしてアフリカのセネガルにおいては西アフリカのグリオと呼ばれる人々とのセッション。この二つが核になっている。そこで僕が思ったのは、スティールパン奏者たちとの演奏ということであれば、トリニダードでよく知られた楽曲を日本語に訳して、その日本語をスポークンワーズスタイルにしてスティールパン奏者たちとコラボレーションする。ここに僕は意味があると思ってそれを実践した。あのドキュメンタリーに残されている通り、非常に上手くいった。それからセネガルにおいては、旅の中で僕が書いた詩があって、それを現地の言葉に訳してもらってグリオのミュージシャン達に伝え、それをもとにやはりスポークンワーズスタイルでセッションをした。これもあのドキュメントに非常によいコラボレーションとして残されている。こういう試みは、僕は世界初だろうと思っている。何よりも驚いたのは、自分で書いた詩を現地語に訳してもらった時、セネガルのミュージシャンたちは、「僕たちの国にもこういうテーマのこういう詩はある。その曲のパーカッションを付けてみる」と言ってセッションをやったこと。あの映像に映っているのは2回、3回練習したものではなくて、たった1回のセッション。

―　あのようなアートフォームはアフリカにもあるんでしょうか。

元春：　アートフォームは近いものはある。だから彼等はキャッチアップできるんだね。やっぱり佐野元春のドキュメントですから、僕にしかできないことは何かということを考えました。番組はあの二つのセッションが核になっているんですけれども、もう一つ、僕が番組を通じて音楽ファンに伝えたかったことは、みなさんが今慣れ親しんで聴いているロック、ジャズ、ブルース、R&B、その源泉がアフリカにあるんだということです。そしてそこには人類として悲しい、恥ずべき歴史があり、それは何かということを伝えたかった。負の文化遺産と言われているゴレ島に行き、そこでドキュメントしました。奴隷制によって世界各地に追いやられた黒人たちが、それぞれの土地で自分達の音楽を奏で、それが行く先々で形を変えて、それがブルースになり、ロックになり、R&Bになり…。すなわち、僕らが好んで聴いているロックやポピュラー音楽の根底にはルーツがあるんだということを伝えたかった。そうすることによって、また音楽の聴こえ方もちょっと違ってくるんじゃないかなと僕は思っているんです。カッコよかったんじゃない？何か真剣に仕事しているなって、僕は自分で観て思いました（笑）。

　スティールパンは本当に難しい。でも意地もありましたからね。日本からはるばるやって来てスティールパンを教えてくれって言っているんだから、一曲ぐらいできるようにならなくちゃ。スティールパンの練習場にいた長老は、最初は東洋からやって来たどこの馬の骨ともわからない奴が、俺たちの文化であるところのスティールパンをどれほど理解できるんだ、みたいな感じだったんだけれども、僕が別のところで1日練習してきたでしょ。上手くなって帰ってきたからまず見る目が違った。それで僕がプロデュースしてセッションが始まったでしょ？こうやるんだ、ああやるんだって。みんなもう

佐野元春のドキュメントである以上、僕にしかできないことは何かを考えた。

のある種一つの損失に立ち会っているなぁということ、僕は現場で感じている。その中にあって、これだけのミュージシャンを揃え、録音するという、この心意気をわかってほしい！わかってくれるかなと（笑）。佐野さん、この『トーキョー・シック』レコーディングを振り返ってどうですかって言われたら一言、「心意気です」と、そういうことです。

―　映像があるのでより伝わってきます。

元春：　映像もやっぱり大事な記録になると思ってビデオカメラを入れました。最近、僕が一緒にやっている近浦（啓）さんというディレクターなんだけど、彼も非常に優秀で、僕の意図を理解してドキュメントしてくれました。あいうドキュメントも、ディレクターやカメラマンがその仕事、そのプロジェクトの意図がわかってないと、焦点が合った映像を撮れないんです。そうした意味で彼は僕のコンセプト、意図をちゃんとわかった映像作家です。彼の腕前もそこで発揮されたなぁと思っています。

　パッケージができたらいの一番に大瀧さんのところに持って行こうと思っていたんだけど、その矢先に亡くなってしまって、それだけは残念。彼だったら絶対に喜んでくれた。



13　ウッドストックにあるビッグ・ピンクの中でギターを弾く元春。

びっくりしちゃって。それでまた日本語と自分達のスティールパンのスポークンワーズセッションが上手くワークするものだからみんなびっくりしちゃって。そして自分の作った詩の中で、マイティ・スパロウをはじめとしたそれまでのあの土地、あの国の音楽の貢献者の名前を僕が連呼する箇所があったんです。その連呼する中にラバンティルの長老の名前を入れてあげたんです。そうしたら長老も喜んでくれて、セッションが終わった時、それまでずっとサングラスをしていたのにサングラスを外して握手してきました。すごくいい一言を言ってくれ、僕もそこでやっと認められたなと思いました。

異文化というのは、最初は互いに分からない者同士ですから、融合はないんだけれども、でも、互いの文化のよきところを探り合って、そこを擦り合わせていくことによって必ず真理に突き当たる。真理っていうのは普遍ですから、国籍だとか関係ない。その真理を二人で確認し合った時に友情が生まれるんです。それが短いドキュメントだけど一瞬でも表れていたかなと僕は思います。それはセネガルのミュージシャン達もそうです。

―― 確かラバンティルの方は日本で会おうって仰っていたかと…。

元春： 日本で仕事したいってことじゃないですか？（笑）。

―― いい作品をありがとうございました。

ラジオ番組というのは僕のキャリアを通してずっとあるものなんだな。

―― 続いて元春レイディオ・ショー（MRS）についてです。先日最後の収録を終えられたと伺いましたが、終えられた今の率直な気持ちをお聴かせください。

元春： 失業しちゃったな、職業斡旋所に行かなきゃいけないかなって。印象で言うとそういう感じです。

―― ずっとこの5年間、普通にあるものだと思っていましたので、私達もショックでした。

元春： そうなんだよね。僕は自分に対して、普通にあるものと思うなよって心の中でずっと思っていました。ですのでそれほどビックリはしなかったんですけれども。

―― これまで佐野さんがメインでDJをされてきた番組の中で、今回のMRS、5年で長いなと思っていたんですけれども、最初のMRSが6年で一番長いんですね。

元春： 今回も6年やりたかったけどね。前回をちょっと超えたかったなっていうのはある。

―― （これまでのラジオDJの年表を見ながら）「ティスティ・ミュージック」が終わってから「レイディオ・フィッシュ」が始まるまで、暫く空白の時期がありましたね。

元春： そこには重大なものが抜けている。それは僕が自費出版でやっていたインターネット・ラジオです。「RADIO MWS」。これが2年間かな？ちゃんとしたスタジオに行って、ちゃんとしたエンジニアをつけて、商業番組と同じ形で自費出版という形でやっていました。これが2年あります。こうして考えてみるとわかるんだけれども、ラジオ番組というのは僕のキャリアを通してずっとあるものなんだな、今まであり続けてきたものなんだなということです。ただ、全国放送かエリア放送かで聴ける人、聴けない人がいるので、ファンであっても全部聴いているという人は少ないと思いますけれど。一言で言うなら、ラジオの制作というのは僕の大事な仕事の一つです。今回のMRS、2009年、またNHKから声が掛かった時には本当に嬉しかった。何故ならば20年以上、僕は待ち望んでいましたから。20年ずっと待ち焦がれていた。ですので、2009年に再開した時には誰よりも僕は嬉しかった。20年待ち焦がれるってどういう感覚かっていうことですよね。

―― DJの仕事、死ぬまでやりたいっておっしゃっていましたからね。

元春： MRSはまた80年代から更に進化した形で、チャートとかにこだわりなく、よりよい音楽を届けていくということをテーマに続けてきました。

―― 基本的なスタイルというものは最初の頃から変わりないんですか。

元春： 僕のラジオショーというのは、僕が感じるところでは83年ぐらいに自分のスタイルを確立したかなって思っています。それでニューヨーク（NY）から放送があり、NYから帰って来てからも放送があり、あの辺りでもうすでに自分のDJのスタイルっていうのはできていたと思います。

―― 思い起こすと、2007年の「サウンドストリート21」で一ヶ月間使っていたオープニングの曲などがそのまま使われているなと気がつきました。

元春： 正規に復活するということを個人的に暗に願っていたということもありますね。

―― 今動画サイトなどで探すと聴けるものがあるんですけれども、その後のMRSとも普通に繋がっているような、そんな感覚になります。

元春： ですので、いつオファーがあっても僕のスタイルでやっているということですね。あとこうしたレギュラー番組以外にちょうど80年代の中盤、全国の大都市で第2FM局ができた。例えばFM愛知であればそれにZIP-FMとかね。一つの都市に二つのステーション体制ということが行政であって、その第2FM局が開局した時に、開局記念として1時間番組を僕が担当したりしている。いくつかあったな。それらを全部聴いているファンというのはほとんどいないと思うんだけれども、そのいずれもMRSの一つのスタイルで貫かれています。

ラジオについて先を見て僕が思うのは、ウェブ・キャスティング（インターネットを通じた動画や音声の配信）が更に発展していくと思うんです。結論から言うと、よい番組はそれを求めている人とちゃんと共有できる時代になっていくだろうと僕は思っている。今ある技術で説明すると、「らじる・らじる」それから「radiko（ラジコ）」っていうのがあるでしょ。らじる・らじるはNHK専門のウェブキャスト・アプリケーション。それから民放は民放連で作っているラジコ。今、触れている人たちはわかると思うんだけれども、ラジコにしても地域が限定されている。それはスポンサーとの兼ね合いがあることはあるんだけれども、しかしこれは僕は今年、来年、大きく変わってゆくように思うんです。つまり、地域限定が外される、そして地域が違う所の人が聴く時には課金制になる。それで解決していくんじゃないかと僕は思っている。いずれにしても僕の興味は、そういう構造になるんだったらどこのステーションでもいいじゃないかって話になってくる。よい番組であるんだったならば、課金であれ、そうでなかった時であれ日本全国、物理的には世界中、望む人がその番組を聴けるという状態に入っていくわけですから。だったらラジオ文化にちゃんと未来はあるなと思っている、と言うか、そのように発展すべきだと僕は思っている。だからまだまだ僕のラジオ番組制作のスキルが、次に時代にも役に立てていただけるだろうと思っている。

―― 今回のMRSで記憶に残っていることはありますか。

元春： あるよ。震災後の放送。震災後も音を鳴り止ますことなくガンガンかけた。あの状況に合わせた番組作りをし、選曲をし、それからトークをした。あの場面はラジオDJとしての真骨頂と言うか、一つの評価されるところだろうなと思って一生懸命作りました。それで印象に残っている。あの震災の後と、それを巡る若干ナイーブなところをテーマにした特集とかね。あの辺は今でもいい番組だったんじゃないかと思います。

―― 番組の中で使っているジングルは昔のものをそのまま使っていたものもあったと思うのですが、新しく作ったりもされたんですか。

元春： この00年代MRSを始める時に、80年代のものをもとにだいぶ増やしました。それを使い回ししていました。でもあの「♪モトハルレイディオショー」というところは変わりない。30年間もジングルが同じ番組って他にないよ。もはやMRSというのは僕のライフワークになって来ているなということですよね。このスタイルで許されるならば一つのスタイルを保ちながらずっと続けていく。

―― 『ラジオ・デイズ』の新しいリリースがありましたが、とても楽しくて面白いアレンジをされていて、嬉しいプレゼントになりました。

元春： 今のところダウンロード（DL）バージョンしかないけれども、DLしたらヘッドフォン等で聴いてもらうといろいろと楽しい仕掛けがあるから、是非聴いてほしいですね。ヘッドフォンで聴くといろいろと楽しい音が聴こえてくるからね。左から右から。

大瀧さんは理知的で緻密な方、学者肌。

―― 昨年末に急逝された大瀧詠一さんとの思い出についてお聞きします。デビュー前には、どのような人だと思われていたのでしょうか。

元春： 「はっぴいえんど」のメンバーであり僕らの世代から見たら専門的な人というイメージです。ちょっと近寄りがたいと個人的には思っていた。彼は言葉を持っていたミュージシャンですから、ところどころで拝見した対談とか彼自身の音楽に対する考え方とかを読むにつれ、しっかりしたフィロソフィー（哲学）のもとに音楽を作っていたのだな、ただの歌手じゃないぞ、という見方でした。

―― 「はっぴいえんど」の音楽についてはどのように感じていたのですか。

元春： よくメディアでも言っているんだけども、反面教師でもあり教師でもあった。日本語を使ってロックを奏でてみようという最初の実験が「はっぴいえんど」にありましたから。僕も下の世代から興味深くそれを見ていた。日本語の文節をこんなにぶった切って、無理やりビートの中にあてはめて、でもなんか面白いなみたいな。でも僕の世代だったらちょっとやり方は違ってこんなこともできるぞとも思った。そういう意味で教師でもあり反面教師。

―― 大瀧さんからナイアガラ・トライアングルのお話がきた時はどう思われましたか。

元春： チャンスが来たぞ、と思った。ロックファン、ポピュラー音楽ファンの人たちが、よく「はっぴいえんど」を聴いていましたから、そういう人たちに自分の音楽をアピールできるいいチャンスが来たぞ、ここはしくじらず一発かますぞという気持ちでした。後に「ナイアガラ・トライアングルVol.2」を作るんだけれども、『週末の恋人たち』とか、ああいうちょっとモータウン的なメロディのある曲、あれは自分の持ち味ではないんだけれどもナイアガラファン、大瀧詠一さんの向こうにいるファンたちに受け入れてもらいたいがためにああいう曲調の曲を書いた。元々メロウな部分もあるけれども、あそこまで甘いメロウなものは自分のアルバムには入れませんでしたから。『バイバイ・Cボーイ』という曲も大瀧さんの『空飛ぶくじら』というシングル曲があるんだけれども、それが頭の隅にありつつ作った楽曲です。一昨年まだ、大瀧さんがご健在の時に「ナイアガラ・トライアングル）Vol.2」の30周年アニバーサリー盤が出て、「レコード・コレクターズ」で僕と大瀧さんと杉（真理）さんとでしっかりした対談をやろうということになった。傍らに萩原健太やジャーナリストがいて、彼らが司会をして約6時間くらいやりました。

―― おぉっ（一同驚く）。

元春： 大瀧さんの取材では6時間ならまだ短い方で、一昼夜かかる時もあるって言っていま

大瀧さんと僕は意外にも出会う前からあちこちでニアミスしていた。



した。大瀧さんはきちんと自分の中で自分の活動の流れを時系列で押さえていて、そればかか一つ一つの出来事に対しての検証がきちんとなされていて、それがコンピュータのように頭に入っているんです。僕とは真逆にある人です。僕は自分のレコードが何年に出たかなんて全然気にしていませんから(笑)。大瀧さんはそういう理知的で緻密な方、学者肌ですね、言ってみれば。今この出来事がなぜ起こったのかは偶然ではない、常に何か理由があってこうなっているんだと考える方です。

そのような視点で「Ｖｏｌ．２」を彼が語り、僕たちがぁそうですね、当時こうでしたと証言していく対談でした。その中で僕は本当にびっくりしたんだけれども、「Ｖｏｌ．２」に参加する前の僕のヒストリーを大瀧さんは全部調べている。僕がアマチュア時代に誰とバンドを組んで、どのコンテストに出て、どういうシンガーに曲を提供して…ということをきちんと検証して、僕でも忘れているような出来事を時系列で紙に書いてきて、ご自身のヒストリーと照らしあわせて、「Ｖｏｌ．２」で出会う前に佐野元春とはどういう接点があったのかということをきちんと解析している。

僕もびっくりしたんだけれども、大瀧さんと僕は意外にも「Ｖｏｌ．２」で出会う前からあちこちでニアミスしているんです。例えば70年代の中盤から後半にかけて大瀧さんが設立したナイアガラレーベル。これは当時コロムビア・レコードとの契約の中で成立していた。当時僕はまだ自分ではプロフェッショナルではなく、佐藤奈々子という女性シンガーに曲を書いていた。その佐藤奈々子はコロムビアに所属していた。よくコロムビアのスタジオでレコーディングしていたんだけれども、その時にコロムビアの中ではナイアガラレーベルがしっかりあって、そこで大瀧さんと僕とはニアミスをしているんです。その前に僕はあるコンテストで『バイバイ・Ｃボーイ』という曲を唄って賞をもらうんだけれども、その曲を大瀧さんは聴いていて、彼の『空飛ぶくじら』という、シャッフルのポール・マッカートニーオリエンテッドな甘いメロディの曲なんだけれども、僕はまさに子供の頃に『空飛ぶくじら』を聴いてインスパイアされて『バイバイ・Ｃボーイ』を書いている。そのことを僕は言わなかったんだけれども、大瀧さんはその『バイバイ・Ｃボーイ』をどこかで聴いてくれて、そこで「佐野元春は天才だ。これで確信した。自分は二十何歳かで『空飛ぶくじら』を書いているのに、この子は16歳でそれにも勝る曲を書いている。この時に確信した」という ことを告白してくれたことが一つ。

それから、ナイアガラレーベルで最初に手がけたのは山下達郎さんのいたシュガーベイブ。その次に伊藤銀次のいたココナッツバンクをデビューさせようとするんだけれども折り合いがうまくいかずリリースはされなかった。そうこうするうちにナイアガラレーベルの運営が頓挫してしまった。その時に、結論から言うと、大瀧さんが言うには、シュガーベイブの次にナイアガラレーベルで売り出したかったのは僕だったと。その頃はまだソニーと契約する4年くらい前ですので、コンテストに出たりコロムビアで女性シンガーに詩・曲を書いたりしている時です。その時に、同じコロムビアで近くにいるなら、なぜコロムビアのディレクターは佐野元春を自分に紹介してくれなかったのかと、すごく悔しそうに言っていました。もし、コロムビアのディレクターが橋渡ししてくれたならば、すぐに契約して、シュガーベイブに続く第二弾は佐野元春でいきたかったと、こういう告白をしてくれました。そうだったのかと思いました。

大瀧さんも雪村さんとの出会いと同じように、ただの偶然ではなく、会うべくして会った方なのかな。

―　それを何年後かには若干違う形でしたが実現させたということですね。

元春：　大瀧さんとも雪村いづみさんとの出会いと同じように、ただの偶然ではなく理由のある出会いであり、会うべくして会った方なのかなと思っています。

―　ラジオ番組でも大瀧さんと佐野さんの仲のよさは伝わっていました。

元春：　僕の音楽的な才能だけではなく、僕はパパッとマンガを描くのも好きなんだけど、一緒にハワイへ行った帰り飛行機の中で面白おかしいマンガを描いたら大瀧さんが「それ、いいね！一万円で売ってくれ」って(笑)。で、売りました。売る方も売る方ですよね(笑)。なんでそこで一万円もらうのか。「大瀧さんいいですよ、タダであげますよ」って言うべきなのに、なんで俺一万円もらったのかなって。たぶん、どこかに取ってあるんじゃないですか。

―　どういうマンガだったのですか？

元春：　覚えていないです。なんか変な状況をスケッチした、シュールなものだったと思います。

―　「Ｖｏｌ．２」でのレコーディングの際に大瀧さんからダメ出しをもらったという話を聞いたことがあります。

元春：　ダメ出しはしなかったです。ただ『彼女はデリケート』をフェードアウトで作っていったら、「ロックンロールはカットアウトだろう」って大瀧さんが言ってカットアウトにしたこと、それから同じく『彼女はデリケート』の僕の歌唱について「もうちょっと生(ナマ)な感じ、パッションで唄った方がいいよ」って言われてそれを録り直したこと。それだけですね。

―　『マンハッタンブリッジにたたずんで』が「Ｖｏｌ．２」に入ったのは大瀧さんの意向なのですよね。

元春：　大瀧さんの意向でした。僕はアルバム「ＳＯＭＥＤＡＹ」と「Ｖｏｌ．２」は同時期でした。そして大瀧さんのところに『彼女はデリケート』『バイバイ・Ｃボーイ』『週末の恋人たち』を持っていって、あとどうしようかという時に「ＳＯＭＥＤＡＹ」の曲を聴いて、『マンハッタンブリッジ(にたたずんで)』これいいね！これが欲しい」ってことになって。彼は彼なりにアルバム「ＳＯＭＥＤＡＹ」のことも考えてくれていたんです。面白おかしく、いやぁ大瀧さんに取られちゃって、と言ったりもしますが、そうではなく話はもっと深くて、大瀧さんはアルバム「ＳＯＭＥＤＡＹ」の構成についてよく考えてくれていました。

あの『マンハッタンブリッジ』はアルバム「ＳＯＭＥＤＡＹ」の中で比較するとしたら『ＳＯＭＥＤＡＹ』と同じ位置にある曲である。１枚のアルバムの中に『ＳＯＭＥＤＡＹ』は２

曲いらない。だから『マンハッタンブリッジ』は「Ｖｏｌ．2」に収録すべきだ。同時期に出ているわけでファンは皆一様に聴くわけだから、どのアルバムに収録されているかは問題ではない。アルバム「ＳＯＭＥＤＡＹ」を考えた時に、『ＳＯＭＥＤＡＹ』という名曲、ポテンシャルを持った曲は2曲はいらないんだよ、「ＳＯＭＥＤＡＹ」を引き立たせるために。こういう深みのある発言を後にしている。僕はなるほどなと思った。

―　すごく緻密な計算ですね。

元春：　ボーンと発言する時に「え、アルバム「ＳＯＭＥＤＡＹ」から『マンハッタンブリッジ』を持っていっちゃうんですか？」みたいな感じに聞こえるかもしれないけれど、その裏にはただの気まぐれではなく彼なりのきちんとした緻密な考えがあってのことだったんです。

―　大瀧さんは長らくアルバムこそ出されていませんでしたが、音楽シーンでの存在感、影響力があり続けた方だと思います。その要因は何だと思われますか。

元春：　やはり、「はっぴいえんど」から始まり、ご自身のソロでいえば「ＥＡＣＨ　ＴＩＭＥ」で帰結したあの流れが、まさに日本語によるポップ、ロック音楽のオリジネーターであるというところでしょうね、存在感としては。それは細野（晴臣）さんにしても松本（隆）さんにしても同じだと思います。今ある日本語のポップスの源流を辿っていくと、そこに大瀧詠一というオリジネーターがいた、一方では細野晴臣がいた、ということへのリスペクトだと思います。

　実際、「はっぴいえんど」だって3枚しかスタジオアルバムは作っていないし、その後、大瀧さんも数的には多くは出していませんが、やってきた内容は濃かった。

―　大瀧さんもラジオに思い入れのある方でした。

元春：　あの方も10代の頃、近くにＦＥＮがあり、そこから流れてくるポップスを聴いて育った方と思います。そこで夢を育んで、ラジオに対しては独特のフィロソフィーを持っている。それが実際形になったのが「ゴー・ゴー・ナイアガラ」でしょうね。僕も「ゴー・ゴー・ナイアガラ」は聴いていました。ＭＲＳで僕が不在の時に大瀧さんが交代でＤＪをしてくれましたが、その時にご自身のＤＪスタイルを披露してくれました。チャック・ベリーとかエディ・コクランを紹介する時のあの軽妙なＤＪスタイル。あれこそが大瀧詠一スタイルです。

　大瀧さんと僕はすごく共通するところがあると思う。ＤＪにしてもそうだし、ポップ音楽に対する考え方もそうだし、表現している音楽もジャンルでいったら多岐に渡っているでしょ。僕もポップス、ロックンロール、ブルース、Ｒ＆Ｂ、スポークンワーズ、映画音楽的なものと多岐に渡っている。大瀧さんもそうですよね。だから資質的に、こういうのもおこがましいですけど、僕と近い方だと思っています。

―　佐野さんが大瀧さんを評した「日本の音楽を垢抜けさせた方」という表現は秀逸と思います。

元春：　いい表現でしょ。「垢抜ける」という言葉は最近あまり使われていないんだけれども、そういう言葉を掘り返してきて、端的にスパッと言う、そういう表現が僕は好き。それを、言いたいことが問うことによって、彼が答えてくれた彼自身の言葉の中からリスナーのみなさん、自分で感じ取ってください、というスタイルにした。まさにドキュメンタリーの基本スタイル、それを徹底した。でも追悼特集のほとんどは、自分は大瀧さんとこうだった、こういうふうに感じた…結局聴いていると、大瀧さんをダシに使って自分のことを語っているに過ぎない。ほとんどの追悼特集なんてそんなもんだ。そんなもんだなんて言うとまた怒られるかもしれないけど、そんなもんだ。

　自分のことなんてどうでもいい。大瀧さんというシンガー、作曲家、プロデューサーが、どういうフィロソフィーを持って僕たちに何を残してくれたのかということを、つぶさに、できるだけわかりやすいやり方で伝える。これが残された僕の仕事だと思いました。あの4週の追悼特集はおそらくＮＨＫにアーカイブとして残ると思うけれども、これから20年後、30年後に、かつて大瀧詠一という素晴らしいアーティストが日本にいました、という話をする時に必ず再放送されるだろう、それを想定して僕は作りました。

大瀧さんというシンガーを、できるだけわかりやすいやり方で伝える。これが残された僕の仕事だと思いました。

―　ＭＲＳでの大瀧さん追悼特集について、追悼で悲しいはずなのに抱腹絶倒の楽しい放送でした。

元春：　最初2週の予定だったんですが、アーカイブを振り返ったら、これもちゃんと伝えなきゃなと思い途中から4週ぶち抜きにしました。実際ちょっと気負い過ぎちゃって「どの追悼特集よりいいものに」と言ったら、一部の人から「追悼特集にいい悪いもあるものか」と言われたけど、俺から言わせれば「あるに決まっているじゃないか」という感じ。

　その愛情の深さによって表れる追悼の特集の形は全然違う。だから4週やって、気をつけたのは自分の感情をあまり出さないということ。客観表現で貫きたい。最後だけ僕の個人的な思いを言ったけれども、あとは大瀧詠一というミュージシャンが何を考え、どこに立っていて、その時々に何を表現しようとしていたのか、彼のフィロソフィーは何なのか、それを僕が問うことによって、彼が答えてくれた彼自身の言葉の中からリスナーのみなさん、自分で感じ取ってください、というスタイルにした。まさにドキュメンタリーの基本スタイル、それを徹底した。でも追悼特集のほとんどは、自分は大瀧さんとこうだった、こういうふうに感じた…結局聴いていると、大瀧さんをダシに使って自分のことを語っているに過ぎない。ほとんどの追悼特集なんてそんなもんだ。そんなもんだなんて言うとまた怒られるかもしれないけど、そんなもんだ。

　自分のことなんてどうでもいい。大瀧さんというシンガー、作曲家、プロデューサーが、どういうフィロソフィーを持って僕たちに何を残してくれたのかということを、つぶさに、できるだけわかりやすいやり方で伝える。これが残された僕の仕事だと思いました。あの4週の追悼特集はおそらくＮＨＫにアーカイブとして残ると思うけれども、これから20年後、30年後に、かつて大瀧詠一という素晴らしいアーティストが日本にいました、という話をする時に必ず再放送されるだろう、それを想定して僕は作りました。

―　大瀧さんの追悼特集の時に久米宏さんが、ラジオは追悼番組には向かない、なぜならその人が今もそこにいて話しているかのようにリスナーに聴こえてしまうから、と言われていました。

元春：　それを利用するんです。まさにそこにいるかのような感じを。テレビだと映像が出てきてかなり具体的なので亡くなったんだなと感じますが、ラジオだとそこに在りし日の声がそのままありますから、そこにすべての感情がある。僕たちはそれを聴くことによって彼の存在を感じることができる。ラジオとはそういうものです。それを利用するんです。それを利用した追悼番組を作るってことです。それについての一つの答えが僕の4週の追悼番組です。まさにリスナーは「あれ？今も生きているんじゃないの？」という気持ちになる。そして亡くなったという悲しみを少し横に置いて心から楽しむことができたはず。4週終わったらまた悲しみが出てくるのかもしれないけれども、聴いている間は「面白いね」って悲しみから少し外れることができる。

　亡くなって悲しいとかそんな個人的なことはラジオでは言うべきではない。みんな悲しいに決まっているのだから。いちいちお前に言われる筋合いはないよと言いたくなる追悼番組はいっぱいある。

　こんなこと言ったら、「えっ？」と思われるかもしれないけど、僕は喧嘩っ早かった。小学校から中学2年まで。中学2年の時、理科室で喧嘩しながらヘッドロックでキメてて、相手の頭に水道の水をジャージャーかけている最中に「僕は何をしているんだ？」って。喧嘩はほんとに無駄だ。暴力に訴えて何かをしようというのは本当に無駄なことだと、その最中にそう思って、そこから暴力反対主義になった。それまでは明けても暮れても喧嘩。僕、強かったから。弱い者いじめを見て我慢できなくなって、喧嘩ってのはこうやるんだよって自ら行ってしまう。

　そういう気質はずっと残っている。追悼番組はこういうふうにやるんだよ、デラックス版というのはこういうふうに作るんだよ。

普段はすごいギタリストがバンドにいるから僕の出る番がないんだよね（笑）。「スモーク・アンド・ブルー」くらいギター弾かせてよ。

　大瀧さんが残したものというのは僕の中に自然に残されていますから、確かに偉大なミュージシャンを失いましたが悲しむ必要はないという思いに至りました。

―　大瀧さんの残したものをぜひ振り返ってみたいと思います。

元春：　それに大瀧さん、必ず節目節目で僕にコメントしてくれました。「ＳＯＭＥＤＡＹ」20周年の時にも僕のインターネット・ラジオにコメントをくださったし、レーベルを独立したときにも面白おかしいビデオを作ってくれて、プレス向けパーティで放映した。また30周年の時も月刊カドカワでテキストをくれました。ずっと僕の活動を見ていてくれた、僕より年上のミュージシャンの中で最も信頼できる人でした。

ビルボード・ライブ、前回とほとんどかぶらない曲を持って行きたいと思っています。

―　スモーク・アンド・ブルー（Ｓｍｏｋｅ＆Ｂｌｕｅ２０１４）の開催が決まりました。セットリスト、ゲストなど、今回の構想があればお話いただければと思います。

元春：　「スモーク・アンド・ブルー」は1回目が2年前でしたが思いのほか好評でした。僕のファンも40代、50代になって、ゆっくり観たいよ、と思われている方もいる。そういう方にとってはうってつけのライブじゃないかと思います。自分にとっては過去に書いた曲で、なかなかホールコンサートでは披露することのない曲をもう一度掘り出してみなさんに披露できるのが楽しいです。ホールコンサートでは時間が限られている。新しいアルバムを出せばそこから演奏したい、古くからみなさんが愛してくれている曲も演奏するとなると、どうしてもこぼれていく曲がたくさん出てくる。自分ではこの曲、この詩は気に入っていて、いつかどこかで発表できないかなというのがたまってきたんだけれども、この「スモーク・アンド・ブルー」というシリーズはそれが全部まとめてできる、言ってみれば一つの入れ物のように思っているので、そこを自分も楽しんでいます。ですので今年の「スモーク・アンド・ブルー」もそういった曲を集めます。前回も15曲くらい唄ったと思いますが、それとほとんどかぶらない曲を持って行きたいと思っています。あと、ドラム、ベース、僕のギター、Ｄｒ．ｋｙＯｎのキーボードにチェロという編成が僕はアレンジのしがいがあるというか、フォーキーな表現には持ってこいですね。

―　今回もチケット争奪戦が大変なことになっています。

元春：　即完売でしょ、チケットは。またビルボードのスタッフも待ち望んでくれています。前回の僕らのパフォーマンスを観て評価してくれていましたから。4、5、6月と連続3ヶ月、東京と大阪で1日2公演です。前回に負けないくらい素晴らしいステージにしたいと思っています。あそこで作ってくれるピザが美味しいんだよね（笑）。

―　専門のギタリストは入れないという意図は。

元春：　普段はすごいギタリストがバンドにいるでしょ。僕の出る番がないんだよね（笑）。「スモーク・アンド・ブルー」くらいギターを弾かせてよって感じだよね。「スモーク・アンド・ブルー」というネーミングも気に入っている。洒落てる。あの空間にピッタリかなと思っている。

―　ゲストの予定はありますか。

元春：　「スモーク・アンド・ブルー」の一つの楽しみは誰がゲストに来るかなというところにもあると思います。まだ考え中ですけれども、誰かセッションしたいなと思う人が僕の中で現実味を帯びてくれば、もちろん一緒にやってみたい。そういう気持ちです。

―　それからネット等で話題になっていましたが、桑田佳祐さんが自身のラジオ番組で選んだ「２０１３年邦楽ベスト20」の1位が佐野さんの『ラ・ヴィータ・エ・ベラ』でした。



元春：桑田くんの今の状態、何か琴線に響いたのかなと思って、聴いてくれて嬉しいと思いました。同世代ですから、同じような音楽を聴いて育ってきたと思いますし、彼は一時期病気になりましたがすっかり復活して元気にやられている。彼はすごい才能を持っている人ですから、いい曲を書いて頑張ってほしいなと思っています。

―それから番組のお仕事でNYに行かれたとのことですが。

元春：漫画家の浦沢直樹さんとNYに行きました。その番組自体は作家同士の対話がテーマにあると僕は理解しています。今回はミュージシャン・佐野元春、漫画家・浦沢直樹という組み合わせで、世田谷にある彼のアトリエに僕がまず行き、2人で僕のフィールドであるNYに行き、いろいろな場所で漫画や音楽、いろいろな話をする、そういう企画でした。ETVの「SWITCHインタビュー達人達」という番組で、4月に放送されると聞いています。NHKからの企画でした。浦沢さんは自分で曲も書くし、レコードコレクターでもあります。アトリエにあるレコード室に連れていってもらったんだけれども、壁一面にいいレコードがいっぱいありました。あんなにたくさんいい漫画を描きながら、よく音楽を聴く時間もあるなと思いました。僕なんか音楽だけで手一杯…。

―佐野さんも漫画の話をされたのでしょうか。

元春：浦沢直樹さんの「PLUTO」。オリジナルは「鉄腕アトム」のストーリーです。みなさんご存知の通り、僕はアトムはよく読んでいましたし、特に「PLUTO」の原作といえる「地上最大のロボット」の巻は子供心に、アトムはどうなっちゃうんだろうとハラハラドキドキして考えさせられる内容でした。それが現代的にリメイクされている「PLUTO」については、読んでアレ？ってなったらイヤだなと思っていたのですが、読んだらすごく楽しくて、なるほどなと感じた。そうした作家である浦沢さんとの対話を僕は楽しみにしていました。彼も音楽大好きで僕の音楽もよく聴いてくれているということで話は弾みました。

―オン・エアが楽しみです。

元春：今日持ってくればよかったんだけれども、浦沢さんがパパッと描いてくれたマンガとサインがある。浦沢さんにこんな話をした。僕は昔、悲しい出来事があった。石ノ森章太郎さんのアトリエに行って一筆書きでサインと絵を描いてもらったんだけど、なんか物足りなく感じて水彩画で色を付けたら目が滲んじゃって、赤塚不二夫の漫画になっちゃったって（笑）。そうしたらアハハって笑って、彼も石ノ森章太郎や手塚治虫さんの漫画を昔よく描いていたらしくて、サイボーグ009を一筆書きで描いてくれて、そこに「色付け厳禁」って（笑）。

来年は35周年。今年はその準備と、自分の足元をもう一度見つめなおす年にしたい。

―今後の予定はいかがですか。

元春：主な予定としては夏フェスがありまして。フジロック・フェスティバルにHKBと出演します。だいたい1時間弱のショウになると思いますが、あの場にふさわしい選曲と演奏をしようと思っています。

それから発表はずっと先のことになりますけれども、CBと新作に向けてのテストレコーディングというか、どういう方向に行こうかというところを探りつつのレコーディングをすでに始めています。ファンの方はご存知の通り来年がデビュー35周年。来年には新作をドロップしたいと思っているし、そうするために今年から作品づくりに向けて進めているということです。

それからまだ全然アナウンスはされていませんが、秋にCBと全国のライブハウスを回りたいなと思っています。普段行けないようなところまで。

ですので「スモーク・アンド・ブルー」とCBとの全国ツアーがあり、レコーディングも進めていて、夏フェスでは大きなアピアランスがあり、本来の僕の仕事であるライブとレコーディング、自分の足元をもう一度見つめなおす年にしたいと思っています。来年35周年でメディアアピアランスも増えるだろうし、また多くのファンと楽しい時間を過ごしたいので、今年はその準備の年と自分では思っています。

―今年のバースデイ時にモウファのラウンジに書かれた佐野さんのコメントが今年のToDo（やるべきこと）リストのようになっていましたが。

元春：伝統的に僕、バーッと喋って、その約束をいくつクリアできるのかみなさんが楽しみにするという、なんかそんな流れになってきちゃいましたよね（笑）。

モウファへの挨拶にも書いたんですけれども、今年重要なのはデイジー・ミュージックの10周年。レーベル創設から10年の間にオリジナルスタジオ盤を3枚、「月と専制君主」というセルフカバーを1枚、それ以外にも映像作品をかなり残している。この10年間で独立系のレーベルでこれだけのクオリティの作品をしっかりリリースしてきているというのは他に例がないと自負しています。これもファンが期待してくれているので、みなさんの期待に応えたいというところが常に原動力になっている。デイジー・ミュージック10周年に際して、僕の音楽活動を支援してきてくれたみなさんにまず感謝したいです。

それから『ヴィジターズ』の30周年でもあるので、これをわかりやすい形で何かやってみたいなと思っています。

もう何十周年だとか数字だとかはごちゃごちゃになっちゃう（笑）。僕は節目のために生きているわけではなくて、ともすると節目のことは忘れがちなので、ファンのみなさん、教えてください（笑）。

―わかりました。本日はありがとうございました。

いつもあるもの、あるのが当たり前と感じているものも、いつまでもあり続けるわけではない。

そんな当たり前のことを改めて感じさせられた突然の発表だった。
2009年から5年間続いた元春レイディオ・ショー（MRS）が2014年3月をもって終了することが私たちファンに告げられたのは1月のこと。
番組は4週にわたる故・大瀧詠一さんの追悼特集の真っただ中。
他の追悼番組とはひと味もふた味も違う構成をし、番組をまとめあげるDJ MOTOに、
私たちファンはまさにこれこそMRS、佐野元春のDJここにありという底力を感じている最中のことだった──。

2014年3月11日、NHK一FM「元春レイディオ・ショー」（MRS）の収録に立ち会うことができた。翌週18日オンエア予定の5年間にわたって放送された最終回分の収録だという。その光景をこの目に焼き付けるべく、渋谷にあるNHKへと向かった。

NHKの建物入口でその姿を見た時から元春の意識が完全に収録モードに入っていることは明らかだった。館内を足早に移動し、スタジオに入るや否や、スタッフに「今日○曲目に予定していた○○だけはカット、あとは予定通りで」。一言告げると、すぐにブースへ。スタジオに入って2〜3分くらいか、すぐに収録がスタートしたのには驚いた。

この番組、生放送ではなく収録であることは以前から明かされていたが、その手法は、生放送のように収録して原則編集なくそのまま放送する、いわゆる「録って出し」のスタイル。よって収録がスタートすれば録音は基本的に止めずに進む。収録時間を示すカウンターもまわりっぱなし。スタジオの緊張感も生放送のような感じでハンパない。いや、逆に生放送なら何か起ころうともオンエアされてしまえばそれまでという部分もあるだろうから、この収録スタイルは制作スタッフにとってはある意味生放送以上に厳しい現場かもしれない。

ブースに一人入っている元春から、随時マイクを経由して制作スタッフのいる副調整室に指示が入る。「DJ・選曲・構成」に嘘はない。すべて元春のコントロール下で収録は進む。
スタッフとのやり取りは曲が流されている最中に行われる。「タイムスケジュールはどんな感じ？」「次の曲の音源はオリジナル盤？リマスター盤？」といった確認から、「曲が終わる30秒前に合図をください。」「次の2曲の曲間に、ジングルを挟んでください。」「この曲のエンディング、余韻までしっかり聴かせて。」といった指示も飛ぶ。その指示は時に厳しく、番組作りに対して妥協を許さない態度が見て取れた。

MRSの収録では、私たちが思い描く通常のラジオ番組の収録風景である、副調整室のスタッフからキューが出てDJが話し出すスタイルとは真逆の光景が展開された。すなわち、番組が始まれば元春はしかるべきタイミングで話し出し、曲のスタート、ジングルのタイミングなどはすべてブース内の元春からアシスタントの後藤さんへのキューで進む。ナレーションからの曲への入りなど、ここぞというポイントが自身の想定通り寸分の狂いもなくスムーズに進むと、大きくうなずいて気持ちよさそうだ。（後藤さんのこの番組収録における元春からの「逆キュー」に対する意識の集中は大変なものであったと思う。）
ただ、そうした「DJ MOTO」の側面がある一方、曲が流れているその他の時間は、普通の音楽ファンの一面も顔をのぞかせる。流された曲が収録されたディスクのインナースリーブをチェックしたり、音楽に合わせて足や身体全体でリズムを取るのはもちろん、ギターを弾く真似をしたり、ドラムセットが目の前にあるかのように叩くふりをしてみたり、机上のエア鍵盤を叩いたり。自身の曲ではもちろんヴォーカリストとして唄っている（実際に声を出していたかはわからないが）。収録の一時間、DJとしての厳しい姿勢と、流している音楽を心から楽しむ態度が全身から慌ただしく交互に表れる。よい音楽、よい番組を全国に届けるDJという使命感と、一音楽ファンである意識。ちょっと相容れない表現かもしれないが、「極めて真剣に音楽を、そしてラジオ番組を楽しんでいる」という一言に集約されるかもしれない。

番組本編は後半に「最後なので少し自分のことをお話します。」と告げて元春自身が立ち上げたレーベル「Daisy Music」10周年を記念し、独立後に発表された楽曲を数曲流すという場面で若干最終回色が感じられたものの、それであっても基本的には通常のスタイルの放送の中での特集の枠内であり、元春らしくあまり感傷的になることもなく進められた。本編収録後、間髪入れずに番組ウェブサイトで聴くことができる「放送後記」の収録へ。後藤さんがブース内で今日の、そしてこれまで5年間のオンエアを振り返った。その後副調整室で、収録した音源の確認と、若干の調整を経て、この日の収録は終了した。

収録後、この日の収録を例にDJの仕事の面白さを話してくれた。「今日、前半に流した曲を見ると、アメリカ東海岸のミュージシャンの楽曲が並んでいるでしょ？そうした曲と曲の間に先日漫画家の浦沢直樹さんとニューヨークに行った話を挟んだんだよね」。曲と曲の連なり（フロー）を重視して曲順を決めていることはもちろん、曲とトークの間の響き合いまで考慮してスクリプトを書いていた一端を明かしてくれた。「もちろんそんなこと、番組内ではいちいち話さないけどね」。この番組、決して音楽に詳しくないリスナーも気持ちよく音楽を楽しめることを考慮した構成にしていたのはもちろん、その一方で、随所でこうした知的な「しかけ」が織り込まれていたことがわかる。



与えられた60分という時間を音楽とトークでどう構成していくかを考え抜く行為に、元春はDJとしてのやりがいと楽しみを見出していたに違いない。楽曲のバックグラウンドがわからない人でも楽しめるし、わかる人であればもっと楽しめる。それが普通のラジオ好き、音楽好きからプロの音楽評論家やディープな音楽ファンまで広い層に受け入れられていた、この番組の深い魅力だったのだろう。

元春は「ラジオDJというものはやることは普遍的だけれども、それを広く届けたり、新しい価値を伝えたりするためにその環境の変化に応じて最新技術を積極的に取り入れていく」という考えを持ち、この番組を通じてもそれを実践してきた。環境の変化にインターネットの普及というものが大きな影響を与えていることは明らかであり、これまでも元春が関与するラジオ番組は、その変化に敏感に反応し、さまざまな対応を行ってきた。この番組においても、ホームページによる告知と音声による放送後記、番組の進行に伴ってタイムリーに更新される曲目リストとその楽曲の購入サイトとの連動、ツイッターによるリスナー間のコミュニケーション、iPhone向けアプリといった、その時代における最先端の技術を積極的に取り入れてきた。そのどれもが、ネット回線速度、端末の処理能力、タブレット端末やスマートフォンなどハードウェアの出現と進化、対応するソフトウェアなど、環境の整備に合わせて少しずつ進化してきたものであり、私たちはそれら元春からの提案を（はじめはおそるおそる）利用し、体感し、慣れ親しんできた。そうした環境が一通り整いつつあるまさにこれから、これまで以上に大きな変化が生まれてくるはず。今この時代にこそ、佐野元春をど真ん中に据えて、その変化の荒波の中をDJ MOTOがどのようにサバイブし、新たな展開を見せてくれるかを見届けていきたいところであったのだが…。

「放送後記」まで録り終わり、副調整室に戻る元春に、NHKスタッフはねぎらいの花束を用意していた。番組終了時によくある光景なのだろうと思って見ていると、元春ははじめ子どもがイヤイヤをするように首を振りながら受け取るのを若干躊躇していた。その態度は「いや、今回で終わりじゃないから。一旦お休みするだけだから。」とでも言いたげな彼なりのメッセージと受け取った。かつて元春が「死ぬまでやりたい。」と言っていたDJの仕事、早い段階での復活を願うばかりだ。

実はこの収録日は前週に収録した番組のオンエア日であったのだが、残念ながら放送をオンタイムで聴くことはできなかった。帰りの道すがら彼にこう言われた。「今日（最終回の1回前）のオンエア分については来週の再放送で聴いてね。今日収録した最終回と2回分で1セットみたいなところがあるから。」佐野元春、収録を終えてもまさに自宅に帰るまでDJ MOTOであった。

文：山田和弘

MRS専用iPhoneアプリケーションを無料配布中！
アプリケーション・アイコンはDJ Motoがデザイン。
iPhoneをお使いの方は是非、Apple Storeからダウンロードを！
https://itunes.apple.com/jp/app/id762077015?mt=8

INFORMATION * 133

ファンクラバーの熱い思いをペンに、またキーボードに託して、編集部までお寄せください。

Cappuccino Talk Meeting

次回読者投稿コーナー　募集内容　　締切り：2014年5月31日(土)必着

このコーナーでは毎号募集するテーマに対し、ハガキ、封書などによる従来通りの投稿を受付するのに加え、インターネット上のmofaサイトのwebCbと連動して、サイトを通じて書き込んでいただくことも可能になりました。投稿方法に関わらず、本誌次号のコーナーに掲載されるチャンスが生まれます。皆さん奮ってご参加ください。

今回募集するテーマは、次の3点に関する感じたこと、思ったこと、考えたことです。

1．ETV「SWITCHインタビュー 達人達」浦沢直樹さんとの対談を観て
2．大瀧詠一さんの訃報に接して
3．本誌133号の感想

http://mofa.moto.co.jp/pc/members/fangine/ctm/index.jsp

MAIL ORDER カフェボヘミア バックナンバー

MOTOHARU NEWS LETTER「カフェボヘミア」のバックナンバーは引き続きMAIL ORDERを受け付けています。売り切れの際は返金させていただきますので、あらかじめご了承ください。なお、現在購入可能なバックナンバーはVol.43、50〜56、58〜132です。他は売り切れですのでご了承ください。

◎1冊 ￥825（消費税込）
◎郵便振替でお申し込みください。
◎振替用紙に次の事項を記入して商品代金と送手数料の合計金額をご送金ください。
　口座番号：00180-3-16594　加入者名：モウファA
　通 信 欄：希望の号名、数、会員番号、電話番号
◎送手数料は、全国共通です。
　1冊 ¥300、2〜5冊 ¥450、6〜12冊 ¥600、13冊 以上¥1,200
◎お申し込み受付期間　2014年6月30日（月）まで当日消印有効

テレフォンインフォメーション

mofa（モウファ）では、元春の最新情報をお伝えする24時間テレフォンインフォメーションサービスをおこなっています。スタッフからのメッセージと最新の情報を随時流していますのでご利用ください。
tel：03−5469−0922（スタッフの対応は平日の月曜〜金曜15:00〜17:00）

ファンレター

元春宛のお手紙・プレゼントは、「佐野元春様」と明記してmofa宛にお送り下さい。スタッフが責任をもって元春に渡します。他の係宛とは別送お願いします。

編集部へのお便り

カフェボヘミア編集部ではみなさんからのお便りを随時お待ちしております。ご意見、ご感想、編集部への提案など、何でもお寄せ下さい。住所、お名前、会員番号を忘れずに。
e-mail：cb@mofa.moto.co.jp

事務局へのお問い合わせ

事務手続きなどでご不明な点などございましたら、mofa事務局までお気軽にお問い合わせ下さい。メール・fax・電話・お手紙で受け付けております。
e-mail：member@mofa.moto.co.jp

全てのお便りの宛先

郵送：〒150-8691　東京都渋谷支店私書箱76号　mofa事務局内　各係
fax：03-5469-3179　※mofaオンラインサービスをご利用の方はe-mailをご利用下さい。
※件名に各係宛の明記と本文中に「会員番号」「お名前」をお忘れなくお願いします。

会員証再発行

会員証を紛失した場合は、実費＋送手数料で再発行します。郵便振替で会費口座へ500円を送金してください。
通信欄：会員番号、会員証再発行希望、電話番号をご記入ください。ご送金後、約1ヶ月で新しい会員証をお届けします。※ 会員証再発行は郵便振替のみでの受付です。

クラブ継続

「mofa」オンラインサービスへアップデートされることによりオンラインによる手続きが可能です。アップデート手続きは、無料です。まだの方は、ぜひ、「mofaサイト」をご利用ください。

◎アップデート手続きはこちらから ー http://mofa.moto.co.jp/
オンラインによるカード決済、コンビニエンスストアをご利用頂けます。従来の郵便振替による受付も今まで通り可能です。

期限切れ後3ヶ月間は継続手続きが可能ですが、その場合期限月にさかのぼっての処理ではなく入金された月からの一年間の継続となり会費未納期に出された会報、DM等は一切お送りできません。4ヶ月以上未納の場合は再入会となります。会費は期限の切れる月の20日までにmofaオンラインサービス又は郵便振替にてご送金下さい。期限切れはトラブルの原因になりやすいので充分気をつけてください。

※ 会員期限証（受領証）は振込受領証またはカード引き落とし明細でご確認頂ける為、発行は致しませんのでご了承下さい。
※ 会員期限は、mofaサイト・発送物宛名シールにてご確認いただけます。宛名シールの出力準備の都合上、末日に継続手続きされた方は旧期限のデータで表示されますが、手続きに不備などなければ完了しております。

郵便振替口座番号：00190-1-106838
加入者名：モウファ
送金金額：1年￥5,000
通 信 欄：継続希望と会員番号、電話番号
※ 旧用紙でもご送金頂けますが金額にご注意下さい。

住所変更

住所、氏名が変更になる場合は、速やかに「mofa住所、氏名変更」係まで、おハガキでご通知下さい。mofaオンラインサービスをご利用の方は、フロントデスクのMOTO TVの下にあります、「メンバーシップ情報」よりご自身で登録データの変更が可能です。尚、発送物の関係上、必ず郵便局に転送届を出すのもお忘れなく。他の係宛のものに同封されますと手続きが遅れる場合がありますので、必ず別送してください。

編集後記

最終回のMRS.噛みしめながら聴きました。リスナーのトゥイートに感動したり笑ったり。ラストの「ボーラスタア」では胸が詰まりました。またいつか佐野さんの声がラジオから流れてくるのを心待ちにしています。今年もいろんなアクションがあるようで本当に楽しみですね。「Smoke & Blue」期待しています。（奥山千亜紀）

ポール・マッカートニー、エリック・クラプトン、ローリング・ストーンズ、ボブ・ディランと、昨年秋からロック界の重鎮達が相次いで来日しています。私は大のビートルズ・ファンなのですが、今回はディランを選びました。ボブ・ディランと言えばビートの末裔。佐野さんと同じ匂いを感じます。日本ではそれほど知名度の高くないディランですが、来日公演のチケットは前売りも含めて発売日に即完売。東京では追加公演も決まっています。日本のマスコミは本当に無知だなと思います。この国の音楽業界はまだ幼稚だから、佐野さんのような真摯なミュージシャンが活動するにはしんどい世界だと思いますが、焦らず騒がず、佐野さんには前進して行って欲しいと思います。ファンの皆さん、どこまでもついて行きましょう。（小林史明）

今年は『ヴィジターズ』30周年、初めて聴いた高校生の時の衝撃は今でも忘れられません。20周年で特別版が出たのがついこの間だったような気がしますが、あれからもう10年経ったのですね。『ヴィジターズ』の名盤ライブ、期待してしまいます。（矢島一朗）

年末の訃報に接し、大瀧さんの音楽を「聴くこと」に並行して、数冊の追悼本を買い込んで、「読む」ことも増えています。ちょうど本誌編集作業中にレコード・コレクターズの「Talks About Niagara Complete Edition」も届き、佐野さんが今号のインタビューで語られている座談会にも改めて目を通しました。

「大瀧詠一」で「A面で恋をして」売れそうだなあ、話題になっちゃうなあ、決定打のシングルになっちゃって歌手として引けなくなるなあ…。普通に考えれば大変なチャンスなのに、むしろ困ったように思いを巡らせる大瀧さん。彼自身、晩年の立ち位置が心地よかったのかもしれないなと感じさせるエピソードです。もちろん佐野さんとの出会いについても詳細に語られています。興味のある方、ぜひご一読を。（山田和弘）

写真／エムズファクトリー

2013年12月17日(火) 恵比寿 The Garden Hall

【L'ULTIMO BACIO Anno 13】 Rockin' Christmas 2013

午後7時過ぎ、客電が落ちるとステージ上に佐野さんとバンドのメンバーが登場。オープニング曲『ナイトライフ』が始まった。今宵は楽しく行こう」というメッセージが伝わって来るようなハッピーな演奏。バンドはコヨーテ・バンド？　基本的にはコヨーテ・バンドだが今夜はスペシャルなメンバー構成。ドラムに古田たかし、キーボードにDr.kyOnという布陣。新しいセッションだ。続いて演奏されたのは、80年代の傑作『スターダスト・キッズ』と『ソー・ヤング』。前者ではイントロは佐野さんがハープを吹いており、ここまではなんとなくハートランド・マナーといった感じだった。「90年に発表した曲です」という紹介の後に始まったのが『ジュジュ』。「佐野さん、それは89年の曲ですよ」と突っ込みたくなったファンは多かっただろうが、アレンジは11年リリースの「月と専制君主」バージョン。モータウンサウンドを思わせる心地いい演奏だ。さて、ここから新作アルバム「ソーイ」からのオンパレード。まずは「今夜のためにアレンジしてきました」というような雰囲気で、佐野さんの過去の曲で言えば『ザ・バーン』収録の『誰も気にしちゃいない』系列の曲に生まれ変わっていた。このアレンジも実に説得力があり、特に古田たかしのタンバリンのリズムキープが印象的だった。第一部も佳境に入り『ビートニクス』『スーパー・ナチュラル・ウーマン』と、コヨーテ・バンド・サウンドが続いたあと、いよいよオーディエンスのみんなが待ち焦がれていた新曲が披露された。今月初めに iTunes 限定でリリースされた新しいクリスマス・ソング「みんなの願いかなう日まで」。最高にビースフルなこの曲の後半では佐野さんがオーディエンスのみんなにコーラスを指導する場面があった。このような試みは佐野さんのライブ史上初めてではないだろうか。オーディエンスのコーラスを二つのパートに分けて最後は大合唱。第一部で最も盛り上がる瞬間となった。「僕には冬の曲が多いんですが、この曲も冬の曲です」との導入で「ナポレオンフィッシュと泳ぐ日」が演奏され、第一部は終了。

約20分間のインターミッションを経て舞台は第2部へ。オープニング・ナンバーは再びアルバム「ソーイ」から『世界は慈悲を待っている』。今回のステージでは「ソーイ」の曲を古田たかし、Dr.kyOnがどのように解釈して演奏するのかに注目が集まったが、何か二人のプレイに力強さを感じた。佐野さん曰く「無敵」とはこのことか。ここでまた「ソーイ」の曲が続くのかと思いきや、曲は80年代の名曲『コンプリケーション・シェイクダウン』『99ブルース』に。この2曲は最近のステージではセットで演奏されることが多いが、アレンジはジャムバンド風のホーボー・キング・バンド。特に両曲でソロを披露したDr.kyOnの存在感は、改めて彼がホーボー・キング・バンドの要であることを痛切に感じさせる。この時点で第2部も早々と盛り上がりを見せてきたが、次の連続ヒット曲演奏で更にヒートアップ。コヨーテ・バンド・バージョンの『約束の橋』、『サムデイ』、そしてなんといっても佐野さんのクリスマス・スタンダードと言えばこの曲『クリスマス・タイム・イン・ブルー』。ここでも客席から「Tonight's Gonna Be Alright」の大合唱が沸き起こった。舞台と客席が一体となる素敵な瞬間だ。ステージはラストナンバーの定番『悲しきレイディオ』メドレーへと続き本編は一旦終了。

アンコールでは三度アルバム「ソーイ」から、『サムデイ』の流れを汲む佳曲『虹をつかむ人』が披露され、今夜の最後の曲『アンジェリーナ』へと続いた。メンバー紹介の後『プロモーターに何か言いたいことはない？』との佐野さんの問いに客席から「もう一曲！」の声。そして大きな拍手。「墓穴を掘ってしまった」と佐野さんはつぶやきバンドのメンバーを集めて何やら相談。おそらく予定にはなかったこの展開に来年も今夜のような楽しい一夜が過ごせたらいいなと胸に思い、恵比寿ガーデンホールを後にした。

文：小林史明

SET LIST

1st.
1. ナイトライフ
2. スターダスト・キッズ
3. So Young
4. ジュジュ
5. ボーラスタア
6. ビートニクス
7. スーパー・ナチュラル・ウーマン
8. みんなの願いかなう日まで
9. ナポレオンフィッシュと泳ぐ日
   interval

2nd.
10. 世界は慈悲を待っている
11. コンプリケイション・シェイクダウン
12. 99ブルース
13. 約束の橋
14. サムデイ
15. クリスマス・タイム・イン・ブルー
16. 悲しきレイディオ

ENCORE-1. 虹をつかむ人
ENCORE-2. アンジェリーナ
ENCORE-3. ナイトライフ



Cappuccino Talk Meeting

ファンクラバーと編集部の交流の場である読者投稿コーナー

名盤ライブ「SOMEDAY」に参加して

私は2Fで観ていたのでちょっとステージまで遠かったのですが、元春がとても嬉しそうで楽しそうだったのが印象的でした。

ダディさん、西本さん、長田さん、銀次さんの演奏やコーラスが聴けて嬉しかったです。もちろん他の方々の演奏やコーラスもですが…とてもステキな夜でした。

プレゼントで頂いたDVDと「名盤ライブ佐野元春THE BOOK」も嬉しかったです。（Blue Moon）

名盤ライブのDVD。ライブの前に見たかったような気もします…。あれだけの想いがつまっていて、かかわる人たちもみんなプロフェッショナルという印象を受けました。あの時代に佐野元春がそれぞれの人たちの才能や感情、テクニックを呼び起し、元春本人もまた感化され生まれた「サムデイ」だったんですね。まさに名盤。DVDを見た方はみな、「名盤・サムデイ」を聴きかえしたのではないでしょうか。（おわり）

名盤ライブ東京公演に友達と行って来ました。31年前、元春と出会ったアルバムSOMEDAYの再現ーそして、久し振りのハートランドメンバーとの再会ということで心躍りました♪

元春&スペシャルバンドの息の合った演奏と心の籠った仕掛けも散りばめられて、僕らを80年代にタイムトリップさせてくれました。元春の音楽と出会って今日まで共に歩んで来れた僕は幸福だったと再確認しました。

そして、最後に「ダディさん、ステージに戻って来てくれてありがとう」ございました。（WILDネコ）

編…ダディ柴田さん、西本明さん、長田進さん、伊藤銀次さん。再現ライブに、かつてのメンバーがまた集結してくれたということがファンとしてもとてもうれしかったですね。